

修士論文

右派ポピュリスト政党を支える政治的価値観研究
ヨーロッパにおける「リベラル故の反イスラーム」の実証的分析

学生氏名 馬場 慎太郎 J24M002

指導教員 浜中 新吾

龍谷大学法学研究科
アジア・アフリカ総合研究プログラム
令和8年 1月16日

目次

はじめに	4
第1章 導入 本研究の問題関心リベラル故の反イスラームとは	5
第1節 「寛容の国」オランダ	5
第2節 右派ポピュリストの登場と「リベラル故の反イスラーム」	6
第2章 理論的検討 ポピュリズムと価値観理論	8
第1節 本研究におけるポピュリズムの理解	9
1 ポピュリズムについての検討	9
2 ポピュリズムとは 一定義に関する議論	10
3 理念的アプローチによるポピュリズムの定義 —ポピュリスト的態度の測定	13
第2節 シュワルツの価値観理論	16
1 価値観と政治的態度	16
2 個人における価値観とは —シュワルツの価値観理論	16
3 価値観の動機付け構造 —円環連続体と高次元価値	17
4 価値観と政治的態度・政治的行動	18
5 特定の政治的文脈における価値観の役割 —ポピュリスト支持者の価値観	22
3章 仮説の導出と分析	24
第1節 代理変数と仮説の導出	24

1 「リベラル故の反イスラーム」の測定 代理変数の設定	24
2 仮説の導出	25
第2節 実証分析 —ロジステック回帰と潜在クラス分析	27
1 データと変数	28
2 分析1 ロジステック回帰と交差項モデル	29
3 分析1の結果 ロジステック回帰	30
4 分析1の結果 交差項モデルの結果	34
5 分析2 潜在プロファイル分析	39
6 潜在プロファイル分析の結果	43
7 分析3 潜在クラスの特徴	44
4章 結論	47

はじめに

2025 年 10 月 29 日、オランダにて下院議員総選挙が行われた。中道左派政党の民主 66(D66)がヘルト・ウィルダース(Geert Wilders)率いるオランダ自由党(PVV)との接戦を制し勝利した(Kirby 2025)。民主 66 党首ロブ・イエッテン (Rob Arnoldus Adrianus Jetten) は勝利宣言にて、今回の選挙戦をポピュリズム運動に対する勝利として位置づけた(Kirby 2025)。

民主 66 と接戦を繰り広げたオランダ自由党は、イエッテンの勝利宣言にもあるように、右派ポピュリスト政党として知られている。特に党首であるウィルダースはイスラーム批判に基づく反移民的姿勢およびにポピュリスト的発言から オランダのトランプとも称される政治家である(John 2017)。まさに近年勢力増している反移民ポピュリズムを体現したような人物であるといえよう。

ウィルダースの主張で注目すべきは反イスラーム・反移民の姿勢とそのロジックである。ウィルダースはイスラームの教えを非リベラルかつ後進的であるとみなし、ムスリム移民をテロの温床であると決めつけるような姿勢をとる。そして、リベラルなオランダやヨーロッパの社会を、非リベラルなイスラームとムスリム移民から保護する建前で反移民を唱える。このように近年、ヨーロッパの右派ポピュリストの反移民的な言説が「リベラル」な価値観に根差していることが指摘されている(Akkerman 2015; 水島 2016: 107)。

本研究の目的は、リベラルな価値観と反イスラーム・反移民的態度が結びつく現象、すなわち「リベラル故の反イスラーム」がヨーロッパ諸国の有権者の間でどの程度広がっているのかを検証することである。特に、右派ポピュリストが掲げるこの一見矛盾するロジックが、ポピュリスト支持者の価値観構造をどのように説明しうるのかを実証的に明らかにする。

本稿の章構成は以下の通りである。第 1 章は導入部として本研究の問題意識を明らかにする。主にオランダの事例を参考に、「リベラル故の反イスラーム」の概念を解説する。

続く第2章は本章の理論的支柱となるポピュリズムとシュワルツの価値観理論について説明する。第3章ではデータ分析及びに、分析に先立つ仮説の導出およびにデータ説明を行う。そして、第4章では得られた分析結果をもとに、本研究における結論を示す。

第1章 導入 本研究の問題関心リベラル故の反イスラームとは

反移民的なポピュリズムがヨーロッパを覆う中で、オランダの事例は本研究の問題関心に照らし典型的なケースといえる。本章では本研究の問題関心である「リベラル故の反イスラーム」なる論理について、オランダの事例を中心に検討してゆく。

第1節 「寛容の国」オランダ

オランダは「寛容の国」として国際的な評価を得ていた。同性婚の合法化や、寛容な移民政策の歴史的実践、労働市場改革などが国際的に評価されてきた(水島 2010)。歴史を遡ると、17世紀から18世紀にかけてオランダは比較的寛容にユグノーの亡命者を受け入れ「寛容の国」としての評価を確立してゆく(Rath 2009)。啓蒙時代には都市文化や出版環境、宗派間の相対的な寛容さが、近代啓蒙主義において重要な土壌となったことが指摘されている(Mijnhardt 2010)。オランダの思想家であるフーゴー・グロティウスやバルーフ・デ・スピノザは自由と寛容を理性に基づいて理論化した思想家であり、近代的寛容論の先駆者として高く評価されている (Frankel 2022; Geddert 2017)。

近代以降はユダヤ人やドイツ・イタリアからの移民を、第二次世界大戦以降はトルコ、モロッコ、インドネシアなどの非西欧圏からの労働移民を数多く受け入れてきた。制度面では、移民は原則として5年間の滞在で永住権が認められ、市町村レベルの選挙権・被選挙権も付与された。1993年から1997年にかけては二重国籍も一部容認されていた(水島

2019:117)。しかしながら、20世紀以降までの「多文化主義」的な移民政策は2000年代以降になって転換期を迎える。

第2節 右派ポピュリストの登場と「リベラル故の反イスラーム」

第2次バルケネンデ(Jan Peter Balkenende)政権(2003年5月～2007年7月)の下で、移民の「市民化」を掲げた統合政策が行われていく(水島 2019: 173)。2006年に成立した「外国における市民化法」では、結婚や家族招致などでオランダに入国する移民に対し、オランダ語および「オランダ社会に対する知識」の試験を受けることを義務づけられた。2007年1月にはすでにオランダ定住している移民も含めたオランダ在住外国人に対する「市民化義務」を課す「市民化法」が成立した(水島 2019: 173-174)。バルケネンデ政権の下で、オランダの移民政策は寛容な「多文化主義」からより厳格な「市民化」政策へと舵を切っていた。

また、ピム・フォルタイン(Pim Fortuyn)の登場も象徴的であった。2002年、コラムニストであったピム・フォルタインは右派ポピュリスト政党を結成し、反移民を掲げて政治の表舞台に現れた。フォルタイン党は同年の総選挙で第2党に躍進し、第1次バルケネンデ政権に参加した(水島 2019: 156)。これ以降のオランダでは反移民主張する右派ポピュリスト政党が定着していく(水島 2016:135)。フォルタインは男女平等や人権・自由といった近代的価値を認めるがゆえに、それを受け入れないイスラームを批判する(水島 2019: 131)。

フォルタインの後継者として台頭したのがウィルダースであった。ウィルダースは2006年以降、反移民・反イスラームを前面に掲げ、現在に至るまでオランダ政治の中心的存在であり続けている(水島 2019:193)。2023年には、ウィルダース率いるオランダ自由党は下院議員の第1党となり連立与党に名を連ねた。また、2025年の総選挙に先立つ、ディック・スホーフ(Dick Schoof)首相は辞職したのは、自由党が移民政策をめぐり連立から離脱したことが原因であった(Kirby 2025)。

フォルタインとウィルダースに共通するのは、自身の反移民的主張を自由や人権といった近代的価値に基づいて正当化している点である。フォルタインは女性解放や同性愛者への差別撤廃を訴え、自身も同性愛者であることを公言していた。その立場から、女性や同性愛者への差別が残るイスラーム社会を厳しく批判した（水島 2019:130–131）。ウィルダースも同様に、「寛容でリベラルなオランダ」を守るためにイスラームの「不寛容」を認めないという論法を採る（水島 2016:157）。水島は、こうした主張に対して自由を基盤としながら「自由の敵」には自由を認めない立場を「不寛容なリベラル」とであると指摘する。（水島 2019:198–199）。

このような事例はオランダに限られたものではなく、近代的・進歩的価値観に基づく反移民的態度は、ヨーロッパ各国の政党や政治家そして、有権者の価値観にも表れていることが多くの研究で指摘されている。（Ackerman 2015; de Lange and Mügge 2015; Simonsen and Bonikowski 2019）。一部の右派ポピュリストは自国の文化の保護を訴えているが、ヨーロッパの右派ポピュリストの指す自国の文化にはリベラルな価値観や自由主義も含まれており、これらの文化にコミットしない移民を排撃する（Blackburn 2021）。

有権者においても特にジェンダーに関するイシューにおいて進歩的な立場を示す人々が、移民や欧州統合には懐疑的な態度を示すこと、特に時代が進むにれて若い世代において顕著であることが報告されている（Lancaster 2020; Lancaster 2022）。

以上のような、近代的・進歩的価値観に基づく反イスラーム的な態度を本研究では「リベラル故の反イスラーム」として捉える。オランダ自由党をはじめとした反移民的なポピュリスト政党が近代的価値観やリベラルな価値観を称揚し、一方で有権者の価値観においても近代的・進歩的な価値観と反移民とが共存していることが報告されている。このことは、よりリベラルな人達の間において反イスラーム・反移民的な傾向が強まっているのか。また、「リベラル故の反イスラーム」こそが、右派ポピュリスト支持を支える価値観であ

るのか、以上の問題関心から本研究では有権者の価値観と右派ポピュリスト政党への支持について実証的な分析を行う。

第2章 理論的検討 ポピュリズムと価値観理論

本章では、本研究のテーマであるポピュリズムと価値観理論を概観する。人々の内面でポピュリズムというイデオロギーを形成し信条とする価値観を理論の面から体系化し、実証分析の準備を行う。

本研究では「リベラル故の反イスラーム」の論理が、有権者の間で実際に共有されているのか否かを分析する。言い換えると、ポピュリズム政党によって示される言説的アピール、すなわち供給側から提起される上記の論理は、支持者の間つまり需要側でも受容され共有されているのか否かが、心的な問いとなる。本章で検討するイデオロギーとしてのポピュリズムとシュワルツの価値観理論は、イデオロギーや価値観といった個人の心理という基層に政党選好や政治的態度の発現因子を見出す。ゆえに、イデオロギーとしてのポピュリズムと価値観理論は、「リベラル故の反イスラーム」が政党と有権者との双方において共鳴し、それが右派ポピュリスト政党への支持につながるという本研究の想定に適している。

Mudde(2004)の理念的アプローチは、ポピュリズムを一種のイデオロギーとみなす。イデオロギーとして理解されるポピュリズムは、そのイデオロギー的核心が有権者と政党が双方に存在するとされる。すなわち、有権者と政党側で、ポピュリズム的イデオロギーが共有されてはじめて、ポピュリズムとされる政治現象が顕在化する。

シュワルツの個人的価値観理論は政治学において広く議論されている(Caprara et al. 2006, Schwartz et al. 2014, Baro 2022)。特に本研究が注目するのは、価値観理論が提唱する構造化

された価値観群である。シュワルツが考案した価値観の「円環的連続体」は「リベラル故の反イスラーム」という複雑な言説を体系に位置付けるうえで非常に有用だと考えられる。しかしながら、シュワルツの価値観理論は個人の政治的な行動や態度を広く説明しているにもかかわらず、ポピュリズムに関する議論はさほどなされていない。本格的な分析を行った数少ない例である Baro (2022)においても、価値観理論とポピュリズムの関係において説明されていない点が存在する。本研究は、価値観理論に基礎づけられたポピュリスト政党支持者の価値観を分析する。

第1節 本研究におけるポピュリズムの理解

1 ポピュリズムについての検討

ここでは本研究におけるポピュリズムの基本的な理解を示すとともに、本研究の問いがポピュリズム研究の系譜の中でいかなる意義を持つのか示す。

理念的アプローチではポピュリズムと相容れない価値観として多元主義、すなわちポピュリズムに特徴的な均質性を拒否し「社会を多様な集合体とみなす」価値観が挙げられている(Mudde 2004: 544)。確かに反イスラームなど右派ポピュリストの排外主義は多元主義とは相容れない主張である。であるからこそ、本来は多元主義とは対極にあるはずのポピュリストが、多様性を尊重するリベラルな価値観に訴求することは非常に興味深い。本研究は、理念的アプローチに基づくポピュリズムと多元主義との関係についてより深い知見を提供することになるだろう。Mudde(2004: 543)の言うように個人の価値観においてポピュリズムと多元主義はやはり相容れないのか、それともポピュリズムの特徴でもある融通無碍な性格は場合によっては多元主義とも結びつきうるのだろうか。個人におけるポピュリスト的態度が、他の価値観やイデオロギーと共存する条件はどのようなものなのだろう

か。ポピュリズムと多元主義の関係について改めて論じることで、理念的アプローチにおけるポピュリズムと他のイデオロギーとの関係について議論を深めることができるだろう。

また、本研究はポピュリズムと民主主義の複雑な関係に関する学術的議論に寄与しうる。ポピュリズムが民主主義にとってどのような影響を与えるのかは、様々な見解が存在する。ポピュリズムを民主主義にとって肯定的に捉える見方では、ポピュリズムは少数者による支配に対して「人民」という政治的フロンティアを構築することで民主主義の活性化を促すものであると見られている(ムフ 2019)。また、ポピュリズムにおける「人民」の称揚は、代表制に根を置くものである(中谷 2017)。であるとするならばポピュリズムの価値観が民主主義を切り崩す決定的な契機とは考えづらい。ポピュリズムが民主主義の敵である結論付けるのは、いささか性急であるように思える。しかし、現代の民主主義を支えるリベラルという価値観ならびに理念についてはどうだろうか。

ポピュリズムを民主主義との敵とみなす論者は、ポピュリズムによる道徳性の独占の主張と、それに基づく二元論(ミュラー 2017:26)により、民主主義を支える多元主義や立憲主義などリベラルな理念ないし制度を毀損する可能性を指摘する(ミュラー 2017:72)。しかし、「リベラル故の反イスラーム」が基礎づけられるのは、まさにリベラルな価値観そのものである。であるならば、その支持者がリベラルな理念や制度を無下にするとはいえない。しかし、一方で「リベラル故の反イスラーム」は有権者一般に見られる傾向でないのだとしたら、つまりポピュリスト的態度を有する支持者が実際にはリベラルでないのだとしたら、ポピュリズムがリベラルな価値観を浸食するという主張は大いに説得力を持ちえるだろう。

2 ポピュリズムとは 一定義に関する議論

ポピュリズムについての議論の多くを占めるのは、そもそもポピュリズムとは何を指し示す疑念であるのか、という定義を巡る議論である。本研究では個人レベルの世論調査で

最も用いられる理想的アプローチを採用する。そこでポピュリズムの定義をめぐる議論における理想的アプローチの立ち位置を理解するために、ポピュリズムの定義に関する議論をごく簡単に概観する。

日本のメディアにおいてポピュリズムは、しばしば「大衆迎合主義」と訳され基本的には負のレッテルとして機能している。また、ヨーロッパにおいては移民排斥を訴える人たちがポピュリストとして紹介される。その一方で、反緊縮派の左派も「左派ポピュリスト」と呼ばれることもある(板橋 2024)。古今東西の多種多様な政治現象や政治家に対してポピュリズムまたはポピュリストという表現が用いられてきた。ときにラテンアメリカにおける左派系大統領をポピュリストであると評価し、またヨーロッパでは主流派に挑戦する右派政党をポピュリストと呼ぶ。アメリカ合衆国においては、左派と右派の双方をポピュリストと呼ぶこともある(ミュデ、カルトワッセル 2017:7)。これらの例が示すようにポピュリズムは一貫した具体的な政策を意味するわけではない。状況や文脈により社会主義やエスノセントリズム、反移民政策など様々なイデオロギーや政策と融通無碍にと結びつく。その多種多様な形態や、ポピュリズムという言葉があまりに広汎に用いられることが原因となって、ポピュリズムという用語の定義に対する混乱が生じている。

またポピュリズムという表現は現実政治の局面で、侮蔑的な意味合いを有して用いられており、政治家や政党が自らをポピュリストと名乗ることはほとんどない(ミュデ、カルトワッセル 2018:7,9)。政敵を貶めたり批判したりする目的で任意の対象に対して、恣意的にポピュリズムという用語が用いられるという事態がしばしば発生する。これではポピュリズムという言葉には相手を貶めるための侮蔑的表現という以上の意味は無いように見える。

このように、あまりにも多様に、そして時に恣意的に用いられるので、ポピュリズムが何を表すのかは非常に曖昧であると言わざるを得ない。もちろん学術的な営みはこのポピュリズムという言葉の定義を巡る問題に様々なアプローチでもって対処してきた。

初期のポピュリズム研究における関心の中心はラテンアメリカであった。ラテンアメリカ研究では伝統的には経済政策に注目するアプローチ、社会構造に注目するアプローチ、政治戦略として捉えるアプローチという3つの定義が採用されてきた(Hawkins and Kaltwasser 2017)。これら3つの定義は、想定する現象は重視する視点が異なるものの、根底にある一連の考え方の概念を共有しており、他の定義で強調されるポピュリズムの特徴は共通のポピュリズム的思想の産物である(Hawkins and Kaltwasser 2017)。

また、個別の経済政策や社会構造から離れて、ポピュリズムと呼ばれる様々な現象に適応させるためにより一般化した定義が近年では採用される。こうした定義は、ポピュリズムと呼ばれる多種多様な現象に見られる共通した特性に注目する。例としては「人民」の立場から既成政治やエリートを批判する政治運動としてポピュリズムを捉える定義(水島 2016:7)や、「人民」という表象の下に社会の多様な要求を等価的な連鎖として集結させ政治的ヘゲモニーに対抗する言説表現の理論としてのポピュリズムを捉える定義(ラクハウ 2018:170-171)が挙げられよう。

上述の定義では、政治家や政党だけではなく、政治運動や言説に呼応する人々の存在をポピュリズムの主体として仮定している。ポピュリズムと呼ばれる政治現象は、政治家の働きかけとそれに呼応する大衆、あるいは大衆の要求を政治家が反映して現前する運動であり、そこには「人民」と「エリート」の対立構造が想定される。

では、どのような人々がポピュリズム運動に呼応するのだろうか。現在最も支配的なポピュリズムの定義となっており、個人を対象とした量的研究でも広く採用されるのが理念的アプローチによるポピュリズムの定義である。理念的アプローチではポピュリズムをイデオロギーの一種として捉える。政党や政治主導者などの供給側と、一般的有権者や市民などの需要側の両方にポピュリズム的なイデオロギーが存在しうることを想定し、ポピュリズムの需要と供給が結び付いたときに政治運動としてのポピュリズムが現れると考える。政治や政党のマニフェストや演説の内容、さらには個人の見解から測定することが可能と

であるとされ(Akkerman et al. 2014; 1328)、したがって需要側におけるポピュリズム的属性も分析の対象となる。理念的アプローチではポピュリズムを需要する個人の態度をポピュリスト的態度として概念化する(Akkerman et al. 2014; 1329)。本研究においても理念的アプローチに基づき、個人にポピュリスト的な態度および要素が存在することを前提に分析を進める。

ポピュリズムをイデオロギーないし、人々が持つ政治へのある種の観念として理解することは、ポピュリスト的態度を実際の政治運動と切り離して分析することを可能とする。ラクラウ(2018)の「言説」の概念はポピュリズムの思想の本質を表すとともに、政治の場において「言説」が実際にどのように展開されるかを一緒に示している。そのため言説理論では、実際に多数派を引き付ける政治運動や政党が存在してはじめてポピュリズム的言説分析することができる。一方で、理念的アプローチはポピュリスト的言説が存在することと、その政治的影響を切り離し、ポピュリズムの言説のロジックがいかなる条件でどのような影響を政治に与えるのかを検証することができる。個人における潜在的なポピュリスト的態度や、少数派の草の根的活動などより多様な運動や政党をポピュリズムとして捉えることができる(Hawkins and Kaltwasser 2017)。

3 理念的アプローチによるポピュリズムの定義—ポピュリスト的態度の測定

本研究が採用する理念的アプローチは、需要側の個人及びに政党や政治家の言説におけるポピュリズムを測定に用いられる。では、それらの試みは実際には何を計測しようとする試みであろうか。例として、個人におけるポピュリスト的態度を測定する世論調査で頻繁に参照される Akkerman et al.(2014)による測定指標に注目してみたい。

先述した通り、理念的アプローチではポピュリズムをイデオロギーや政治に対する観念として理解する。理念的アプローチの提唱者であるミュデは「社会が究極的に『汚れなき人民』対『腐敗したエリート』という敵対する2つの同質的な陣営に分かれると考え、政

治とは人民の一般意思の表現であるべきだと論じる中心の薄弱なイデオロギー」である定義する(Mudde 2004: 543.)。

理念的アプローチにおけるポピュリズムとは、それぞれが同質的な「汚れなき人民」と「腐敗したエリート」に区別される二元論や、人民中心主義に基づく道徳的な観念であり、社会や政治のあるべき姿への物事の考え方である(Hawkins et al. 2012)。ポピュリズムは、具体的な政治的計画や解決策を提示することではなく、必然的にポピュリズムは「中身の強固な/中身のつまった」イデオロギー、例えば、ファシズムや自由主義、社会主義といった他のイデオロギーと結びつく。それゆえに「中身が薄弱な」ポピュリズムは他のイデオロギーと結びついた多種多様な形態をとる(ミュデ、カルトワッセル 2018:14-15)。

ポピュリズムの核心は 3つの中核的な要素に還元できる。第 1 に、ポピュリズムは人民中心であるとともに、反エリートでもある。ポピュリズムは、純粋な人民と腐敗したエリートを対立させる。第 2 に、純粋な人民と腐敗したエリートの二分法は敵対的な二元論である。最後に、ポピュリストは、政治とは人民の一般意志の表現であるべきだと主張する(Mudde 2004)。

個人におけるポピュリズムの観念を捉えるために、ポピュリスト的態度という概念が取り入れられる。アッカーマンらはオランダで実施したパネル調査において、理念的アプローチにおけるポピュリズムの 3つの中核的な要素に注目し 8つの質問項目を作成した。

(Akkerman et al. 2014: 1331)。アッカーマンらの指標ではポピュリスト的態度は、人民主権の重視およびエリートへの反感そしてマニ教的善悪二元論に基づく世界観の 3つの特徴から構成される (Akkerman et al. 2014: 1331)。このようにポピュリスト的態度は、民主主義における主権者たる人民の称揚と、人民を蔑ろにしてきた悪しきエリートや既存政治に対する反感をもち、そして政治とは究極的には「人民」と「エリート」という同質的な 2つの陣営の闘争であるという二元論的な世界観によって特徴づけられる。アッカーマンにおける具体的な質問項目は表 1 の通りである。

政党におけるポピュリズムも、ポピュリスト的イデオロギーに基づく政党のレトリックの測定がなされている。本研究ではポピュリスト政党の識別のためにエキスパートサーベイの Global Party Survey を用いる(Norris 2020, GPS 2019)。GPS においてもポピュリスト的なレトリックが測定の設計には理念的アプローチが用いられている。例えば GPS には多元主義的レトリックとポピュリスト的レトリックを対比させ、政党のポピュリズムを測定する質問項目がある。その項目においてポピュリストのレトリックは「既存の政治制度の正当性に異議を唱え、人民の意志が優先されるべき」という主張に特徴付けられる。対照となる多元主義的レトリックでは、「選出された指導者が、少数派の権利、交渉と妥協、そして行政権に対する牽制と均衡によって制約された上で統治すべき」という主張によって特徴付けられる(Norris 2020: 701-701)。政党のポピュリズムも有権者と同様に、反多元主義、反既成政党、人民の意志の称揚といった理念的アプローチに基づくポピュリズム理解に基づき測定されている。

POP1	オランダ議会の政治家たちは、人々の意志に従う必要がある。
POP2	重要な政治的決定は、政治家ではない人々によってなされるべきだ。
POP3	政治における人々とエリートの違いは、人々の間における違いよりも大きい。
POP4	自分は専門化された政治家よりも、市民によって代表される。
POP5	選挙で選ばれた役人は多くのことを主張するが、行動に移すことはほとんどない。
POP6	政治とは究極的には悪と善による戦いである。
POP7	政治において「妥協」と呼ばれるものは、実際には自らの主義や原則を売り渡しているに過ぎない。
POP8	利益団体は政治的決定においてより大きな影響を有している。

表 1 Akkerman et al. (2014)における質問項目

第2節 シュワルツの価値観理論

1 価値観と政治的態度

有権者は「リベラル故の反イスラーム」的な価値観と、右派ポピュリスト政党への支持を確認するために本研究では個人の価値観を体系化したシュワルツの価値観を採用する。

個人を分析の対象とする本研究のアプローチは、政治的態度や政策・政党の選好が、イデオロギーや価値観といった個人の内面的要素に基礎づけられているということを前提にする。無論、投票行動や政党支持を規定する要因は価値観のみではなく、社会経済的属性や政治的状況要因など多岐にわたるとされる。しかしながら、多くの研究が、個人が有する価値観のあり方が政治的態度や政治参加を体系的に方向づけることを示しており、政治学においても価値観の役割は繰り返し指摘されてきた(Caprara et al. 2006; Schwartz et al. 2014; Baro 2022)。

先述の理念的アプローチによるポピュリズムの理解も、個人におけるポピュリスト的な傾向が、ポピュリスト的な言説を反映する政党への支持を促すという見方に立つ。本研究では「リベラル故の反イスラーム」を一種の価値観の表現(価値志向の形態)であると想定し、その言説が表現する価値観を共有する有権者が存在と、彼らが実際にオランダ自由党をはじめとする右派ポピュリスト政党への投票するのかどうかを検証する。

以上の問題設定を踏まえ、本研究では個人の価値観体系と政治的態度の関係を理論的に整理するためにシュワルツ (Schwartz) の価値観理論を採用する。

2 個人における価値観とは —シュワルツの価値観理論

本研究では、個人の政治的態度および政治的行動の根底にある動機付けを理解するための枠組みとして、シュワルツ (1992, 2012) の「基本的人間価値観理論 (basic human values theory) :以下、価値観理論」を採用する。価値観とは「人生において指針となる原理とし

て機能する、望ましい目標の認知的な表現」であり、人々の生活における指針となる広範な目標として定義される (Baro 2022; Schwartz 1992; Sagiv and Schwartz 2022)。価値観は個人が人生において何を重要な目標とするのか、いかなる状況を望ましいものとするのかの判断を方向付ける基準として機能する (Sagiv and Schwartz 2022)。以上のように定義される価値観は、人生の様々な局面で個人の価値判断の基盤となる。同性愛者への寛容さや移民に対する態度、支持政党など政治に関わる個人の価値判断や、その価値判断に基づく行動や態度の表現も価値観が基底にあると考えられる。シュワルツの価値観理論において価値観は政治的態度や行動を理解する上でも重要な概念である。

3 価値観の動機付け構造 ―円環連続体と高次元的価値

シュワルツの価値観理論の重要な特徴は、目標となる価値が互いに孤立して存在するのではなく、価値同士の両立可能性および対立関係に基づく価値観の構造として理論化した点にある。価値は個別に人々の振る舞い影響を与えるのではなく、個人における相対的な重要性に基づき価値観の円環状の構造をなす。

シュワルツ(1992)によると個人の行動を動機づけとなる目標は 10 個の価値に分類される (表 1)。それぞれの価値は動機付けの衝突と互換性に基づいた「円環連続体 (circular continuum)」として組織化されている (図 1) (Schwartz 1992; Schwartz et al. 2013)。

円環連続体として組織化される価値は、円環上で隣り合う価値観 (例えば、慈善と普遍主義) は動機付け的に近接しており、ある価値を追求することにより、隣り合う価値の追求も同時に達成されやすい。反対に、円環の対極に位置する価値観 (例えば、自己志向と同調) は動機付け的に対立しており、一方を追求することは、対立する価値の追求の抑制を伴う (Schwartz 1992)。この円環構造によって政治的態度の差異を「どの価値観が強いかわけ」だけでなく、「価値の優先順位の配置」すなわち、価値観構造として捉える視点を提供する。

さらに価値は円環構造上で相互に融和しあい、近しい価値同士は統合され、高次元の価値を形成する。これらの高次元の価値は、主に二つの次元によって整理される (Schwartz 2012: 814)。第一に、「変化への開放性 (Openness to Change)」対「保守性 (Conservation)」である。前者の変化への開放性は独立した思考や行動、変化への受容 (自己志向、刺激) を重視する。後者は自己抑制や秩序の維持、安全の追求 (安全、同調、伝統) を重視する。とりわけ保守価値観は、不安や脅威を回避し、自己および現状を保護する必要性に根ざしているとされる (Schwartz 2006; Schwartz et al. 2013)。第二に、「自己超越 (Self-Transcendence)」対「自己高揚 (Self-Enhancement)」である。自己超越は他者の福祉や平等への関心 (普遍主義、博愛) を中核に持つ一方、自己高揚は個人的成功や他者に対する優位性 (権力、達成) を中核とする。自己高揚価値観には、支配や承認の獲得を通じて不安や脅威の源を克服しようとする側面が含まれる (Schwartz 2010; Schwartz et al. 2013)。

以上の整理から、個人が特定の政治的争点に示す態度や政策選好は、価値観円環上のどの方向に位置づくかという観点から理論的に把握しうる。本稿では後述する政治的態度 (移民、同性愛等) を、価値観円環構造の中でいかなる方向性と結びつくかという形で整理し、分析の枠組みとする。

4 価値観と政治的態度・政治的行動

価値観と政治的態度やイデオロギー、投票との関係は、個人的価値の研究において多くの注目を集めている領域である (Sagiv and Schwartz 2022)。

一般的な傾向として普遍主義や自己志向の価値観は、左派/リベラル政党への投票を予測し、保守性の価値観は右派/保守政党へ投票と関連することが知られている (Schwartz et al. 2010; Dirilen-Gümüş et al. 2012)。また、具体的な政治状況や社会規範に関連する個人の信念である「中核的な政治的価値観 (core political values)」は、個人的価値観が政治領域において表現されたものとされる (Schwartz et al. 2013)。したがって個人的価値観は、政治に関

する具体的な態度のあり方と関連する。例えば「個人自律的な意識決定を尊重すべき」とする「市民の自由」は、変化への開放性(自己志向)およびに自己超越(普遍主義、慈悲)の価値観と正の相関にある。

個人的価値観は、中核的な政治的価値観や態度よりも抽象的で基本的であり、政治的イデオロギーを含むあらゆる個人の意見の根底に位置づけられる (Schwartz 1994, Schwartz et al. 2013)。先行研究では、価値観が直接に政治行動を規定するというよりも、「価値観—態度—行動」という階層的構造を通じて影響を及ぼすことが示されている。すなわち、個人の価値観の優先順位が中核的な政治的価値観（例えば法と秩序、平等、自由な企業活動）を形成し、それがより具体的な政治的選択や投票行動を媒介するのである (Schwartz et al. 2013)。

Schwartz et al. (2013) による 15 カ国を対象とした多国間研究では、個人的価値観が年齢、性別、教育、収入といった社会人口統計学的変数よりも政治的価値観の分散を実質的に多く説明し、さらにこれらの変数の影響の大部分を媒介することが示された (Schwartz et al. 2013)。例えば、「法と秩序」や「盲目的愛国心」といった政治的態度は、不安回避や自己保護を動機とする保守性価値観と強い正の相関を示す一方、他者への寛容や自律性に関わる普遍主義や自己志向とは負の相関を示す (Schwartz et al. 2013)。この知見は、価値観構造が政治的態度の方向性を体系的に規定しうることを示唆する。

本稿が検討する「リベラル故の反イスラーム」は、特定の政治的態度の組み合わせ、すなわち反イスラームとリベラルな規範の併存として理解されるため、価値観が政治的態度を媒介しつつ投票行動に影響を与えるという階層的枠組みがとりわけ重要となる。本稿では、価値観がどのような態度形成と結びつき、それが右派ポピュリスト政党への投票を促進しうるのかを実証的に検討する。

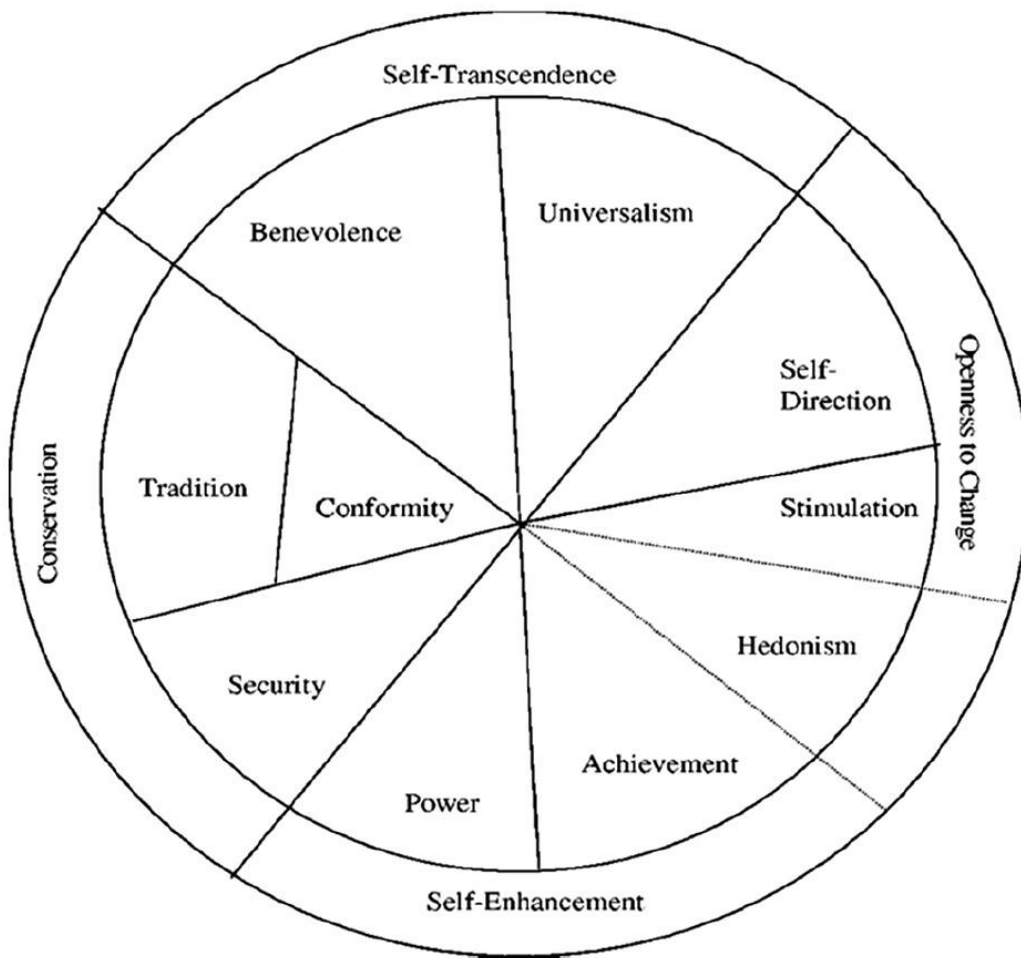


図1 価値観の円環的連続体

高次元の価値	10 の価値		価値
Openness to change (変化への開放性)	Self-direction	自己志向	独立した思考と行動：選択、創造、探求
	Stimulation	刺激	人生における興奮、挑戦、新規性
	Hedonism	快楽	自分人のための喜びと、感覚的な満足感
Self-enhancement(自己強化)	Achievement	達成	自らの能力を示すことによる、社会的な成功
	Power	権力	社会的地位、名声と、他人や資源に対する支配
Conservation(保守性)	Security	安全	自分自身および人間関係、社会の安全、安定、調和
	Conformity	同調	他人の傷つけ混乱させたり、社会的規範に違反したりする行動の抑制
	Tradition	伝統	伝統的な文化や宗教の尊重し、それが自らに与える影響への受け入れ、コミットメント
Self-transcendence(自己超越)	Benevolence	慈悲	身近な人への福祉の維持、向上
	Universalism	普遍主義	全ての人々の福祉と自然への理解および、寛容、感謝、擁護

表2 Schwartz(1992)より 10 の価値と、4 つの高次元の価値

5 特定の政治的文脈における価値観の役割 ―ポピュリスト支持者の価値観

まだ数は限られているものの、シュワルツの価値観理論はポピュリズム支持の動機付けを解明する枠組みとしても用いられている。ここでは代表的な例として Baro (2022)の議論に注目する。 理念的アプローチを中心にポピュリスト支持者の価値観や態度、イデオロギー的側面の役割に焦点が当てられて来た。イデオロギーとしてのポピュリズムはその中核をなす価値観が存在する。ポピュリストを支持する有権者にとって、ポピュリズムのイデオロギー的中核をなす価値観が重要である(Baro 2022; 1192, Mudde 2004)。以上の見方に立ち、Baro(2022)は左右を超えたポピュリスト支持者心理的基盤として、シュワルツの価値観理論に基づく分析を行った。

ポピュリズムの排他的・敵対的な社会観は、「善なる人民」対「腐敗したエリート」および「外集団」という二項対立に基づくことが多く、他者の福祉や平等への関心を重視する自己超越価値観とは矛盾しやすい。そのため自己超越の優先順位が低い個人ほどポピュリスト政党を支持しやすいと指摘されている (Baro 2022: 1196, 1203)。また、権威主義的なポピュリズムが訴える「脅かされている人民を保護する」という主張や「過去への郷愁」は、不安を回避し現状の安定を求める保守的な価値観と親和性が高い (Baro 2022: 1196)。

一方で、Baro(2022: 1196)では当初、保守性はポピュリスト政党への投票を促し、そして保守性とは対極に位置付けられる変化への解放性の価値観は、これをあまり重視しない人こそがポピュリスト政党に投票すると仮説を設けた。とりわけ高い保守性と、低い変化への開放性は、特に右派ポピュリスト政党へ投票すると考えた(Baro 2022; 1196)。しかし、分析の結果、変化への開放性と右派ポピュリスト政党が正の相関にあることが示された (Baro 2022: 1200-1201)。変化への開放性が右派ポピュリスト政党への投票する点に関して十分に理解されていない。特に、価値観の円環構造において対極に位置するはずの保守性

と変化への開放性が同時に右派ポピュリスト政党への投票を説明した点は非常に興味深い結果であるといえる。

本研究が注目するように、近年の右派ポピュリスト政党は単純な保守主義的訴えにとどまらず、「女性の権利」「性的マイノリティの保護」「表現の自由」などのリベラル規範を掲げつつ、イスラームをそれらの価値への脅威として位置づける言説を展開している。これは一見すると自己超越や変化への開放性といったリベラルな傾向になる価値観と整合的である。一方、特定集団への排除や敵対を含む点で排外主義とも接続する。すなわち、「リベラル故の反イスラーム」は、価値観構造に照らしても単純に「保守」価値観の延長として還元できない可能性がある。

Baro(2022)で示された、右派ポピュリスト政党支持者における変化への開放性と保守性の両立についても示唆を与えるものである。市民の自由を重視する変化への開放性と、移民への反発や愛国心と関連する保守性は、「リベラル故の反イスラーム」的な価値観の表現であるのではないだろうか。

以上を踏まえ本稿は、シュワルツの価値観理論に基づき、有権者の価値観構造が政治的態度（移民への態度、同性愛者への態度等）をどのように方向づけ、それらが右派ポピュリスト政党への投票に接続しうるのかを検証する。とりわけ、排外主義が「リベラルな価値」と結びつくことで正当化される可能性に注目し、「リベラル故の反イスラーム」的言説が有権者に共有されうる条件を実証的に明らかにすることを目的とする。

3 章 仮説の導出と分析

第1節 代理変数と仮説の導出

1 「リベラル故の反イスラーム」の測定 代理変数の設定

有権者の「リベラル故の反イスラーム」的な傾向の実態についての仮説を設けて分析を進めるためには、有権者のリベラル志向と反イスラーム志向を測定する必要がある。しかし、有権者が持つこれらの価値観の傾向を直接観察することは難しい。例として、リベラルな価値観と多文化主義的な価値観とが、強い相関関係にあることを示す研究もある (Breidahl et al 2017)。つまり測定方法や価値観の解釈によっては、「リベラルであること」は多文化主義的であると、すなわち「反イスラーム的でないこと」と定義する見方もある。

本研究における目標は「リベラル」であるが故の「反イスラーム」の観測を試みることである。したがって「リベラルであること」と「反イスラーム的であること」が矛盾しないように変数を操作的に定義しなければならない。そこで「リベラル的傾向」と「反イスラーム的傾向」という二つの概念の双方に代替となる変数を設定し、これらを操作化する。

まず、リベラル的傾向の代理変数として、「同性愛者への寛容さ」を用いる。リベラルが擁護する包括的性や多様性には社会的マイノリティーに対する寛容さが想定される。リベラル派の伝統には同性愛者を含む社会的マイノリティーの擁護の価値観が含まれているとされる (サリヴァン、2015:174-175)。したがってリベラルであることの代理変数として、同性愛者への寛容であることを用いることは妥当であろう。また、マイノリティーを擁護するリベラルな有権者が、同じマイノリティーでも同性愛者には寛容でありイスラームや移民には不寛容でありえるか、という本研究の問いにも即している。

反イスラーム的傾向の代理変数として「ヨーロッパ外の貧しい国からの移民への態度」を用いる。この表現は直接ムスリム移民を指している文言を含んではいないが、近年急増

した「ヨーロッパ外の貧しい国からの移民」は中東およびアフリカのムスリム移民を含意している。とりわけ 2015–2016 年の EU 域内の庇護申請急増局面では、申請者の主要国籍がシリア、アフガニスタン、イラクなど中東・南西アジアすなわちイスラーム圏に集中していた（Eurostat 2016）。イスラームはウィルダースのようなポピュリストによってリベラルな社会の敵であるとされた。単なる移民や外国人ではなく、ヨーロッパ外からの移民としたのは、「リベラル故の反イスラーム」の標的は「非リベラル」と見做されるイスラームだからである。

2 仮説の導出

本研究では、「リベラル故の反イスラーム」が、理論的に対立するはずの価値観（変化への開放性と保守性）を同時に重視する態度として現れる可能性に注目する。もしこの仮説が正しいければ、次の 2 点が成立するはずである。

。

H1 a : 保守性と変化への開放性の双方を高く評価する有権者が一定数存在する。

H1b : 保守性と変化への開放性が双方とも高い有権者は、右派ポピュリスト政党に投票する

リベラルの代替変数である同性愛者への寛容さと、反移民的な傾向の両立が「リベラル故の反イスラーム」だとするのであれば、同性愛者への寛容かつ反移民的な人は右派ポピュリスト政党へ投票する可能性が高い

H1c : 同性愛者への寛容かつ反移民的な人は右派ポピュリスト政党への投票する可能性が高い

「リベラル故の反イスラーム」が、リベラルな社会や価値観を擁護する政治的価値観の現れであるとするなら、市民の自由を擁護と結びつく価値観、とりわけ変化への開放性の価値観が反移民と結びつくと考えられる。特にその傾向がオランダ自由党をはじめとする右派ポピュリスト政党に特有のロジックであるなら、右派ポピュリスト政党支持者において変化への開放性と反移民的態度が結びつく可能性が高い。

H2a : 変化への開放性を支持する人はポピュリスト政党を支持する可能性が高い。

H2b : 変化への開放性高く、かつ反移民的な人は、右派ポピュリスト政党に投票する可能性が高くなる。

一方で、従来は保守的とされてきた人々の間で、よりリベラルな考え方が一般的になっているのであれば、愛国心や反移民とつながりが強い保守性の価値観が、同性愛者への寛容さなどの進歩的な態度を見せると考えられる。また「リベラル故の反イスラーム」的な文脈でより、保守性と同性愛者への寛容は両立する。

H3a ; 保守性の価値観を有する人は、右派ポピュリスト政党への投票可能性が高い。

H3b ; 保守性の価値観を有し、同性愛者への寛容な人は右派ポピュリスト政党に投票する可能性が高くなる。

Baro(2022: 1202-1203)によれば、保守性と変化への開放性の相反する価値観が、同時に右派ポピュリスト政党への投票を優位に説明した。これは明確な価値観の対立構造の希薄さこそが、右派ポピュリスト政党支持者に特有の価値観構造であると考えられる。

本研究では以上の仮説を検証する分析を進めていく。「リベラル故の反イスラーム」はヨーロッパ諸国の有権者の間でどのように受け入れられてるのかが、本研究の問いであった。以上の仮説群は、主に「リベラル故の反イスラーム」を個人の価値観構造における、価値観の表現のあり方であると捉える。「リベラル故の反イスラーム」は矛盾する政治態度の現れであるなら、対立する価値観を同時に追求するような価値観構造が表れるはずである。一方で、同性愛者への寛容さおよび反移民的態度といった政治的な態度が、特定の価値観によって両立するものであると位置付けられるのであれば、特定の価値観の持ち主が同性愛者への寛容と反移民を両立する可能性がある。そしてそのような価値観は、「リベラル故の反イスラーム」をアピールする政党への支持につながるだろう。本研究ではBaro(2022)が示した右派ポピュリスト支持者における矛盾した価値観のありかた(変化への開放性と保守性両立)に注目し、これらの価値観が実際にどのような政治態度と結びつくのか、そして右派ポピュリスト政党への支持を説明するのかを検証する。

第2節 実証分析 一ロジステック回帰と潜在クラス分析

仮説を検証するために、本研究では2段階の分析を行う。1段階目は右派ポピュリスト政党への投票を従属変数としたロジステック回帰を行う。一連のロジステック回帰では価値観と政治的態度が右派ポピュリスト政党への投票に及ぼす影響を確認する。

続けて行う分析では、より価値観の構造を意識した分析を行う。価値観は単独で影響を与えるのではなく、個人の中での相対的な位置付ける重要であるという理論な想定に則るものである。具体的な手法として潜在クラス分析(LPA)を用いて、価値観構造の傾向から回答者を分類する。この分析では価値観構造のクラスを従属変数ととり、そのクラスを特徴付ける政治的態度およびに政党選好を分析する。

1 データと変数

本研究では個人レベルの世論調査データである European Social Survey(ESS)の第9回目のラウンド(2018年から2020年に調査を実施)を主に使用する。また2019年に実施されたエキスパートサーベイである。Global Party Survey(GPS)を利用し政党の属性を分析する。

ESSにはシュワルツの価値観理論反映を目的とした21の質問項目(Portrait Values Questionnaire 21 ; PVQ21)が存在する。回答者はある価値観を重視している仮想の人物についての記述を読み、そこで想起される人物像に、自分がどの程度当てはまるか(自分に似ているかどうか)を回答する。本研究では文章への同意度が高いほど、その価値観のスコアが高くなるようにコード化する。

反イスラーム的態度を測定するためにEU外からの移民の是非を問う質問への回答を用い、リベラルさを測定するため同性愛者への態度を尋ねた質問への回答を用いる。反イスラーム的な態度の代理変数として「EU圏外の貧しい国からの移民を受け入れるべきかどうか」という項目を採用する。スコアが高いほど移民の受け入れに反対する。また、同性愛者への寛容性は「親族に同性愛者がいると恥ずかしいと感じるか、どうか」の質問項目を採用する。スコアが高くなるほど同性愛者へ寛容になるようにコード化する。

価値観と政治的態度、投票の関係は主に、旧共産圏と西欧諸国とで体系的な差異があるとされている。特に価値観が投票に反映される度合いは西欧諸国がより強い傾向にある(Lönnqvist and Ilmarinen, 2024)。本研究では西欧および北欧における右派ポピュリスト政党が存在する、オランダを含めた9か国を対象とする。

右派ポピュリスト政党は Global Party Survey (GPS) におけるポピュリスト指標を利用する。GPSには理念的アプローチに基づくポピュリズムが測定されている。その項目に基づき4段階評価で最もポピュリスト的政党である4に分類される政党をポピュリストとする。ま

た、右派政党は GPS に統合されている ParlGov の政党属性(Right-wing または Conservative) から特定する。GPS には理念的アプローチに基づくポピュリズムが測定されている。表 3 は以上の分類に基づき特定された右派ポピュリスト政党の一覧である。

年齢、教育水準、性別を統制変数として用いる。教育水準は ESS にて順序カテゴリとして登録されている値を用いる。スコア高くなるほど、その回答者より高度な教育課程を修めている。性別は男性を参照カテゴリし、男女の 2 値変数として扱う。

国	政党名	右派・保守
オーストリア	オーストリア自由党 (FPÖ)	Right-wing
ベルギー	新フラームス同盟 (N-VA)	Conservative
デンマーク	デンマーク国民党 (DF)	Right-wing
フランス	フランス国民連合 (FN)	Right-wing
ドイツ	ドイツのための選択肢 (AfD)	Right-wing
イギリス	イギリス独立党 (UKIP)	Right-wing
オランダ	オランダ自由党 (PVV)	Right-wing
ノルウェー	進歩党 (Frp)	Right-wing
スウェーデン	スウェーデン民主党 (SD)	Right-wing

表 3 Global Party Survey (2019) より右派ポピュリスト政党一覧

2 分析 1 ロジステック回帰と交差項モデル

一連の分析では価値観及びに政治的態度がどのように右派ポピュリスト政党に影響を与えるのか検証する。右派ポピュリスト政党を従属変数としたロジステック回帰を行う。独立変数は価値観の特に高次元の 4 つの価値を価値観の独立変数とする。PVQ21 の回答をもとに、それぞれの高次元価値に対応する質問の値の平均値から高次元価値のスコアを作成する。また、政治的態度として、反移民的態度と同性愛者への寛容さも独立変数とする。

仮説 H1a と H1b では、保守性と変化への開放性の両立すること、そして双方の価値観が同時に右派ポピュリスト政党へ支持と結びつくことと仮定した。これらの仮説を踏まえて、保守性と変化への開放性の交互作用項を導入する。仮説 H1c では同性愛者への寛容かつ、反移民的な有権者が、右派ポピュリスト政党へ投票すると仮定した。この仮説を検証するために、同性愛者への寛容さと反移民的態度の交互作用項を導入する。

また、価値観と政治的態度の関係を検証するために、価値観と政治的態度の交差項も導入する。仮説 H2b では、変化への開放性高く、かつ反移民的な人は、右派ポピュリスト政党に投票する可能性が高くなると仮定した。また仮説 H3b 保守性の価値観を有し、同性愛者への寛容な人は右派ポピュリスト政党に投票する可能性が高くなると仮定した。よって、変化への開放性と反移民的態度の交差項及び、保守性と同性愛者への寛容さの交差項を分析に取り入れる。

3 分析 1 の結果 ロジステック回帰

表 1 の結果から、反移民的態度はすべてのモデルで右派ポピュリスト政党への投票と有意に正の相関を示している。他方、同性愛者への寛容さはほとんど右派ポピュリスト政党への投票には寄与しない。右派ポピュリスト政党支持者は強く反移民的態度を見せる一方で、同性愛者への態度に関しては中立的である。「リベラル故の反イスラーム」とは言えないまでも、少なくとも同性愛者に対しては非リベラルなどとは言えない。

また、全体モデルにおいて一部の価値観が右派ポピュリスト政党への投票と有意に関連することが示された。変化への開放性と保守性の価値観が高い人は右派ポピュリスト政党に投票する傾向が強い。他方で、自己超越の価値観は有意な負の相関を見せた。この結果は Baro(2022)の報告をほぼ再現している。一方で、Baro の研究では保守性のオッズ比は、変化への開放性のオッズ比よりも高く、保守性がより右派ポピュリスト政党への投票を予測していた(Baro 2022)。本研究での分析では、保守性よりも変化の開放性がより強く右派

ポピュリスト政党への投票を予測する。この結果は、本研究が分析サンプルを北欧ならびに西欧諸国に限定したためだと考えられる。本研究において、オランダでは変化への開放性の価値観のみが右派ポピュリスト政党への投票を予測した。Baroの結果との比較から、ヨーロッパにおいて右派ポピュリスト政党への投票と価値観の結びつきにはある程度の地域差があると考えられる。

図3および図4は、政治態度と保守性、変化への開放性の価値観の国ごとの係数である。やはり、反移民的態度はほとんどの国で有位に右派ポピュリスト政党への投票を予測する一方で、同性愛者は反移民的態度ほどの一貫性は見られない。オーストリア、ノルウェー、スウェーデンでは同性愛者への寛容さは負の方向に作用する一方で、ベルギーでは正の相関を示す。また、以上の国家以外では、同性愛者に寛容であるかどうかと、右派ポピュリスト政党への支持との間には統計的に有意な結果は得られなかった。

価値観に関して、保守性は正の相関を見せたデンマークを除いて、有意な結果は見られない。変化への開放性は、オランダ、ノルウェー、オーストリアで統計的に有意な結果が得られた。

一連の分析から、保守性や変化への開放性といった価値観や同性愛者への寛容さは、一部の地域では右派ポピュリスト政党への投票と関係があるが、西北ヨーロッパ全体で一貫した傾向を看取できない。一方で反移民的態度はほとんどの事例で右派ポピュリスト政党と強い正の関係にある。価値観や同性愛者への態度を超えて、北欧および西欧では反移民的態度こそ右派ポピュリスト政党への投票を予測するようである。

	オランダ(価値観)	オランダ(反移民:同性愛)	オランダ(完全)	全体(価値観)	全体(反移民:同性愛)	全体(完全)
(Intercept)	0.12*** (0.05)	0.14*** (0.05)	0.11*** (0.05)	0.22*** (0.02)	0.20*** (0.02)	0.30*** (0.04)
変化への開放性z	1.30+ (0.19)		1.37* (0.20)	1.29*** (0.04)		1.29*** (0.04)
保守性z	1.02 (0.14)		1.01 (0.14)	1.27*** (0.04)		1.14*** (0.04)
自己超越z	0.82 (0.11)		0.89 (0.12)	0.79*** (0.03)		0.89*** (0.03)
自己強化z	1.07 (0.15)		1.01 (0.15)	0.99 (0.03)		0.95 (0.03)
女性	0.51** (0.13)	0.43** (0.11)	0.48** (0.13)	0.70*** (0.04)	0.69*** (0.04)	0.72*** (0.04)
教育水準z	0.34*** (0.06)	0.39*** (0.06)	0.37*** (0.06)	0.65*** (0.02)	0.71*** (0.02)	0.72*** (0.02)
年齢z	0.94 (0.12)	0.86 (0.11)	0.91 (0.12)	0.91** (0.03)	0.83*** (0.03)	
反移民z		1.87*** (0.23)	1.90*** (0.24)		1.90*** (0.06)	1.86*** (0.06)
同性愛寛容z		1.01 (0.12)	1.00 (0.12)		0.99 (0.03)	0.99 (0.03)
年齢						0.99*** (0.00)
Num.Obs.	1156	1134	1134	11873	11698	11698
AIC	521.5	492.1	494.2	8623.7	8125.5	8067.3
BIC	561.9	522.3	544.5	8682.7	8169.7	8140.9
Log.Lik.	-252.750	-240.052	-237.098	-4303.832	-4056.727	-4023.626
RMSE	0.24	0.24	0.24	0.33	0.32	0.32

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表4 ロジステック回帰の結果(オッズ比)

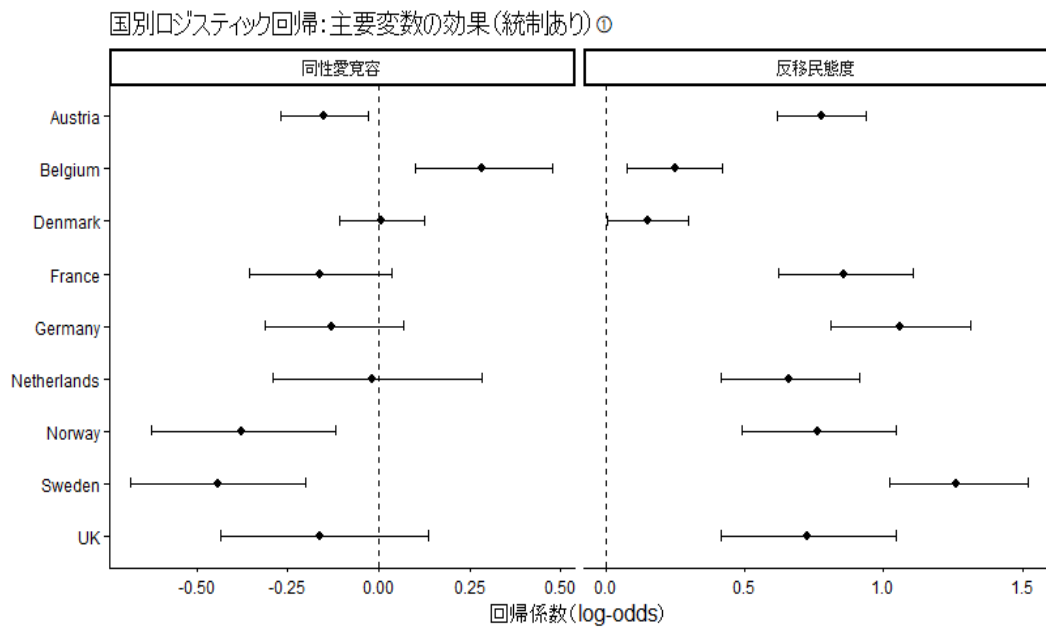


図2 政治的態度の国ごとの係数

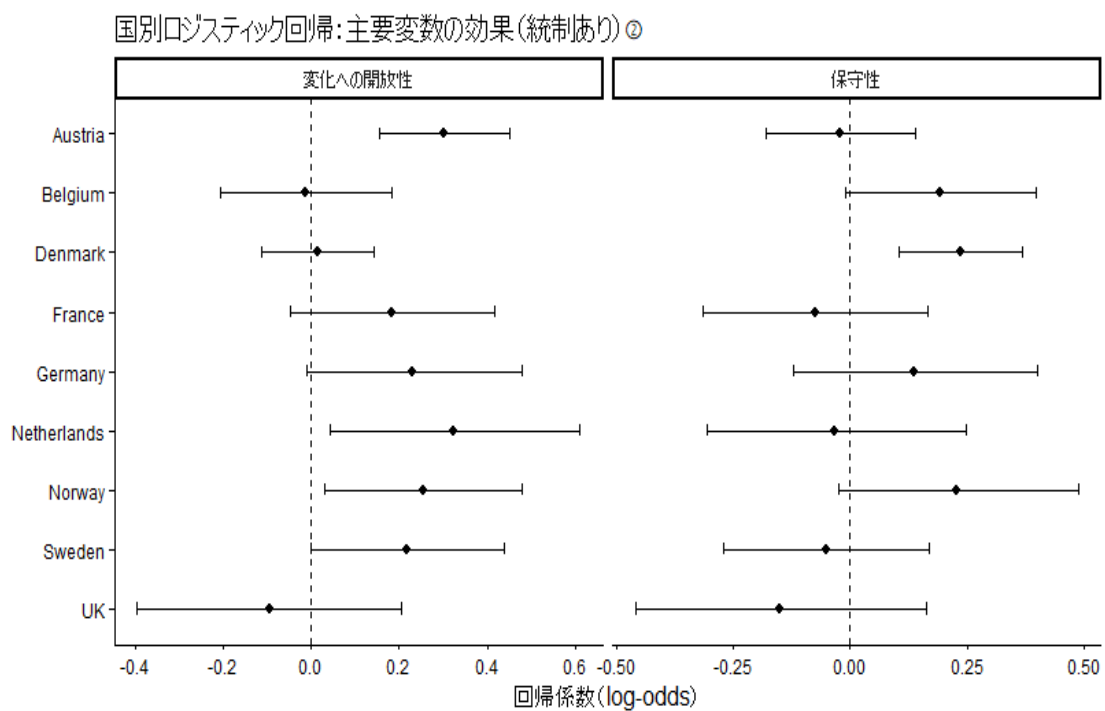


図3 保守性・変化への開放性の国ごとの係数

4 分析1の結果 交差項モデルの結果

交差項を含むモデル(表5：オランダ、表6全体)でも、前回のロジステック回帰と同様に変化への開放性と反移民的態度が右派ポピュリスト政党への投票を有意に予測する。

オランダでもやはり変化への開放性と反移民的態度が右派ポピュリスト政党への投票を予測する。一方で変化への開放性と反移民的態度の交互作用は認められなかった。今回のモデルにおいてもオランダでは保守性の価値観及びに、同性愛者への寛容さ、そして両者の交差項は有意ではない。オランダでは変化への開放性の価値観と、反移民的態度は独立して右派ポピュリスト政党への投票に影響を与えるようである(図4：交互作用の予測プロット)H2bで予測した、変化への開放性と反移民的態度の関係は、オランダのモデルでは支持されない。

全体のモデル(表6)ではも変化への開放性と反移民的態度が右派ポピュリスト政党への投票と有意な正の相関を見せた。また交差項を含むモデルでは変化への開放性と保守性の交差項および保守性と同性愛者へ関係の交差項が有意であった。

保守性がより高い人は、変化への開放性が強まると右派ポピュリスト政党する可能性が高く。予測プロット(図5)では、保守性による投票可能性の差異は、変化への開放性が高い場合により強まる傾向が確認できる。

また保守性と同性愛者への寛容さの交差項も優位に右派ポピュリスト政党への投票を予測する。図6の交互作用の予測プロットでは、同性愛者への寛容さが高い人では、保守性の価値観が強まるにつれ右派ポピュリスト政党への投票する可能性が高くなる。しかし、国ごとの係数を確認すると(図7)、同性愛者への寛容さと保守性の交差項が有意になるのはオーストリアだけあった。価値観と態度の交互作用は限定的な国家で有意である。また、交差項を含むモデルにおいても、変化への開放性と反移民的態度は独立して右派ポピュリスト政党への投票を説明する。

	オランダ	オランダ(交差項:態度×態度、価値×価値)	オランダ(交差項:態度×価値)
(Intercept)	0.12*** (0.05)	0.12*** (0.05)	0.12*** (0.05)
変化への開放性z	1.33* (0.17)	1.33* (0.17)	1.42* (0.22)
保守性z	0.97 (0.13)	0.97 (0.14)	0.96 (0.13)
反移民z	1.93*** (0.24)	1.93*** (0.24)	1.96*** (0.25)
同性愛寛容z	0.99 (0.12)	0.96 (0.14)	1.01 (0.13)
女性	0.46** (0.12)	0.46** (0.12)	0.45** (0.12)
教育水準z	0.37*** (0.06)	0.37*** (0.06)	0.37*** (0.06)
年齢z	0.90 (0.12)	0.90 (0.12)	0.90 (0.12)
変化への開放性z × 保守性z		0.99 (0.12)	
反移民z × 同性愛寛容z		1.03 (0.12)	
変化への開放性z × 反移民z			0.91 (0.11)
保守性z × 同性愛寛容z			0.89 (0.11)
Num.Obs.	1134	1134	1134
AIC	491.0	494.9	493.5
BIC	531.2	545.2	543.8
Log.Lik.	-237.476	-237.435	-236.746
RMSE	0.24	0.24	0.24

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表5 交差項モデル：オランダ(オッズ比)

	全体	全体(交差項:態度×態度, 価値×価値)	全体(交差項:態度×価値)
(Intercept)	0.19*** (0.02)	0.19*** (0.02)	0.19*** (0.02)
変化への開放性z	1.22*** (0.04)	1.21*** (0.04)	1.22*** (0.04)
保守性z	1.08* (0.03)	1.07* (0.03)	1.09** (0.03)
反移民z	1.88*** (0.06)	1.88*** (0.06)	1.87*** (0.06)
同性愛寛容z	0.98 (0.03)	1.02 (0.04)	0.95+ (0.03)
女性	0.70*** (0.04)	0.71*** (0.04)	0.71*** (0.04)
教育水準z	0.71*** (0.02)	0.71*** (0.02)	0.72*** (0.02)
年齢z	0.86*** (0.03)	0.86*** (0.03)	0.86*** (0.03)
変化への開放性z × 保守性z		1.05* (0.03)	
反移民z × 同性愛寛容z		0.96 (0.03)	
変化への開放性z × 反移民z			1.01 (0.03)
保守性z × 同性愛寛容z			1.14*** (0.03)
Num.Obs.	11698	11698	11698
AIC	8077.0	8074.8	8056.3
BIC	8135.9	8148.5	8129.9
Log.Lik.	-4030.475	-4027.394	-4018.134
RMSE	0.32	0.32	0.32

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表 6 交差項モデル：全体(オッズ比)

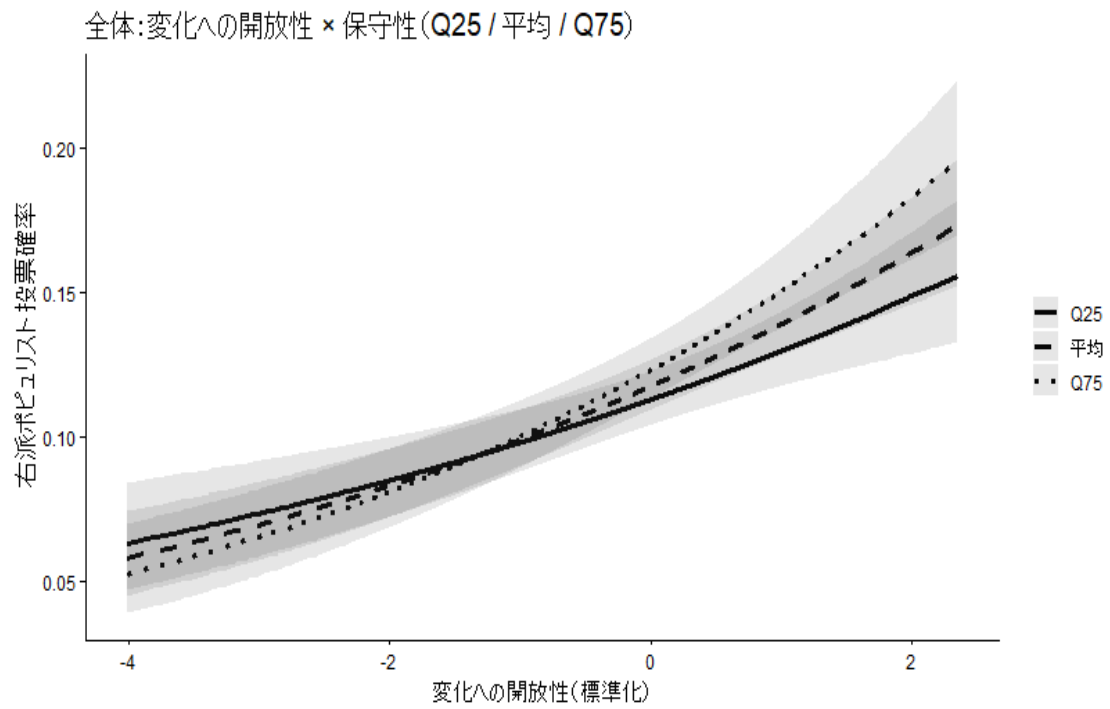


図4 全体：変化への開放性×保守性の交互作用予測プロット

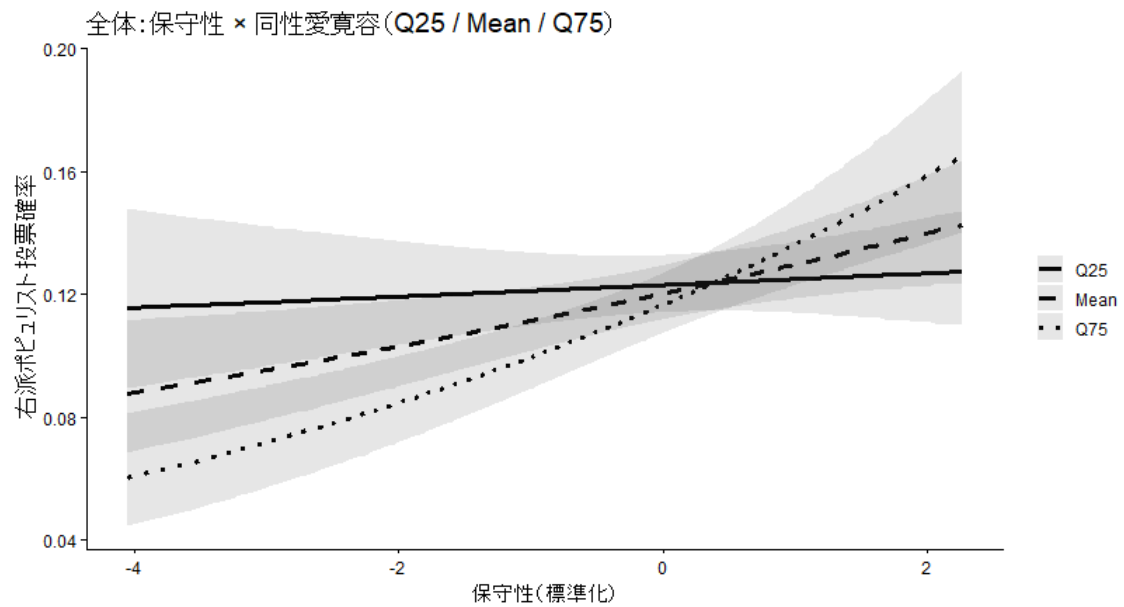


図5 全体：保守性×同性愛者への寛容さの交互作用予測プロット

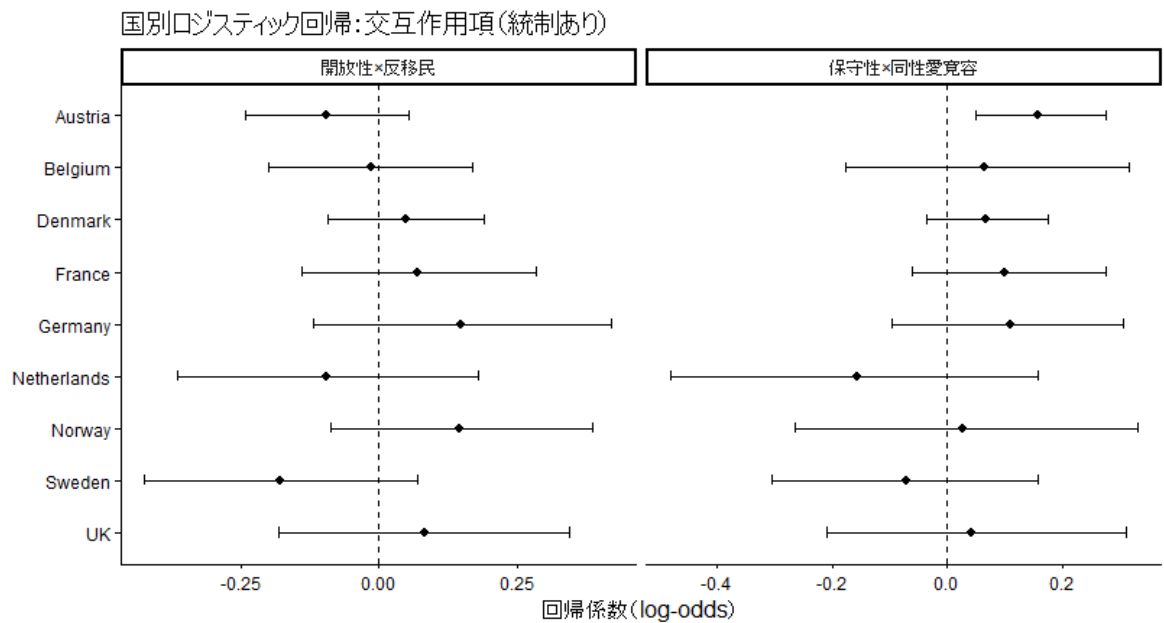


図 6 交差項の国ごとの係数(変化への開放性×反移民的態度、保守性×同性愛)

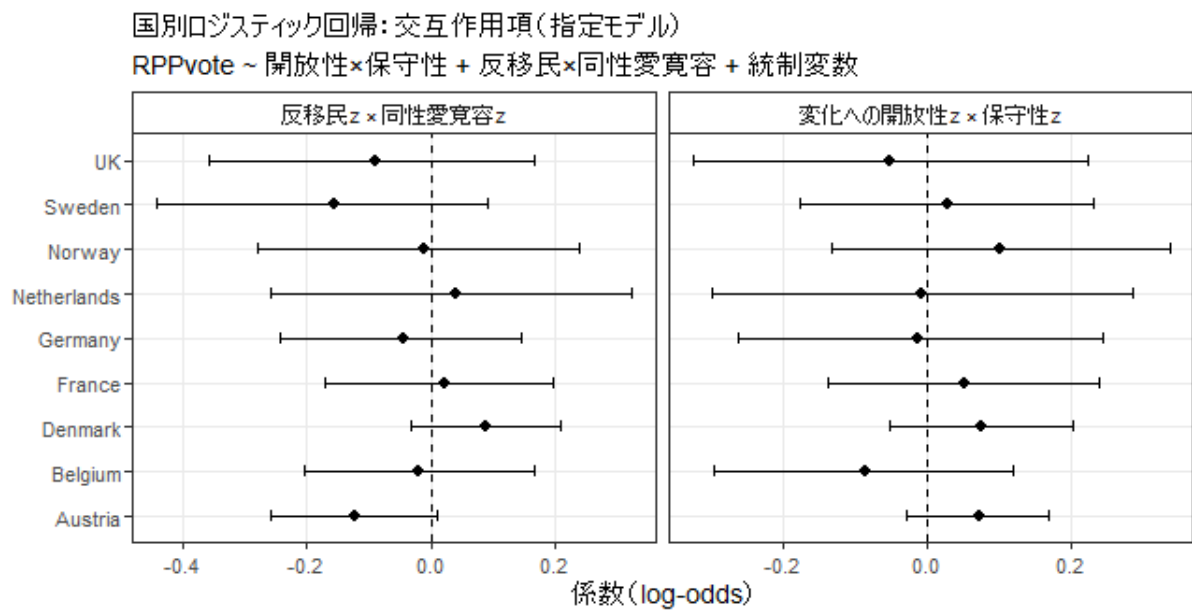


図 7 交差項の国ごとの係数(反移民的態度×同性愛、変化への開放性×保守性)

5 分析2 潜在プロファイル分析

続いて、有権者の価値観構造を捉えるため潜在プロファイル分析を用いた分析を行う。

潜在プロファイル分析(Latent Profile Analysis; LPA)は観測される連続的な変数の背後に、直接観測されない有限数の離散的なクラスが存在を推定する。サンプルである個人は推定されるいずれかクラスに確立的に属する。また、クラスの数や内容は事前に想定せず、統計的手掛かりをもとに決定する。クラスの内容も分析者が事後的にその傾向を判断するので、極めて探索的手法であるといえる。価値観理論を採用した先行研究でも、価値観に関する測定変数からその背後想定されるクラスを分析する手法が取り入れられている(Xie et al. 2022)

理想的な潜在的なクラス数を決定するため、本研究では複数のクラス数を仮定したモデルを推定し、統計的指標および解釈可能性を基準として最適なクラス数を選択する。具体的には、分析サンプルをオランダに限定した場合と全体サンプルを用いる場合に分け、潜在クラス数を1から8まで変化させたLPAモデルを推定した。

モデル適合度の比較には、情報量規準であるAIC(Akaike Information Criterion)およびBIC(Bayesian Information Criterion)を基準とする。AICおよびBICはいずれも値が小さいほどモデルの当てはまりが良いことを示す指標であるが、とりわけBICはモデルの複雑さ(クラス数の増加)に対してより強いペナルティを課すため、潜在クラス数の決定において重要な手がかりとなる。実際にオランダサンプルでは、クラス数6つ付近でBICの改善が頭打ちとなる傾向が確認された。

さらに、クラス分類の安定性を確保する観点から、推定された最小クラスのサイズも併せて検討する。その結果、両サンプルともクラス数4つのモデルにおいて最小クラスの規模が一定程度確保されており(オランダ17%、全体16%)、過度に小さいクラスが生成されにくいことが確認された。

以上より、過剰なクラス分割を避けつつモデル適合度と解釈可能性の双方のバランスを考慮し、本研究では最終的にクラス数 6 つと 4 つのモデルを採用する。

クラス数	AIC	BIC	クラスの明瞭さ(Entropy)	最小クラス(%)	BLRT_p
1	69730.04	69942.72	1.00	1.00	—
2	68494.57	68818.66	0.72	0.40	0.01
3	67753.07	68188.57	0.74	0.28	0.01
4	67430.66	67977.56	0.74	0.17	0.01
5	67314.13	67972.44	0.74	0.09	0.01
6	66909.97	67679.68	0.76	0.09	0.01
7	66757.09	67638.21	0.75	0.09	0.01
8	66649.63	67642.15	0.76	0.08	0.01

表 6 オランダをサンプルとした場合のクラス数推定

クラス数	AIC	BIC	クラスの明瞭さ (Entropy)	最小クラス(%)	BLRT_p
1	714850.45	715160.92	1.00	1.00	—
2	697290.63	697763.73	0.76	0.48	0.01
3	690898.40	691534.12	0.75	0.27	0.01
4	684546.35	685344.70	0.77	0.16	0.01
5	681201.72	682162.71	0.76	0.12	0.01
6	679337.44	680461.05	0.77	0.08	0.01
7	677476.83	678763.07	0.75	0.07	0.01
8	675743.08	677191.94	0.75	0.07	0.01

表 7 全体をサンプルとした場合のクラス数推定

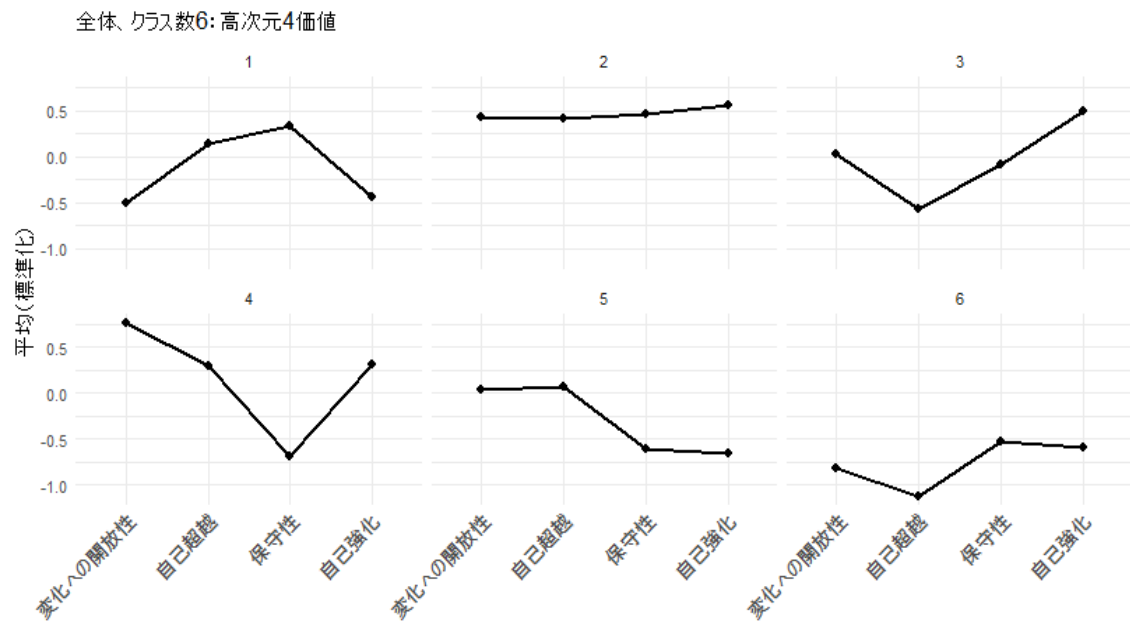


図 8 全体：クラス 6 つの場合の各クラスの価値観構造

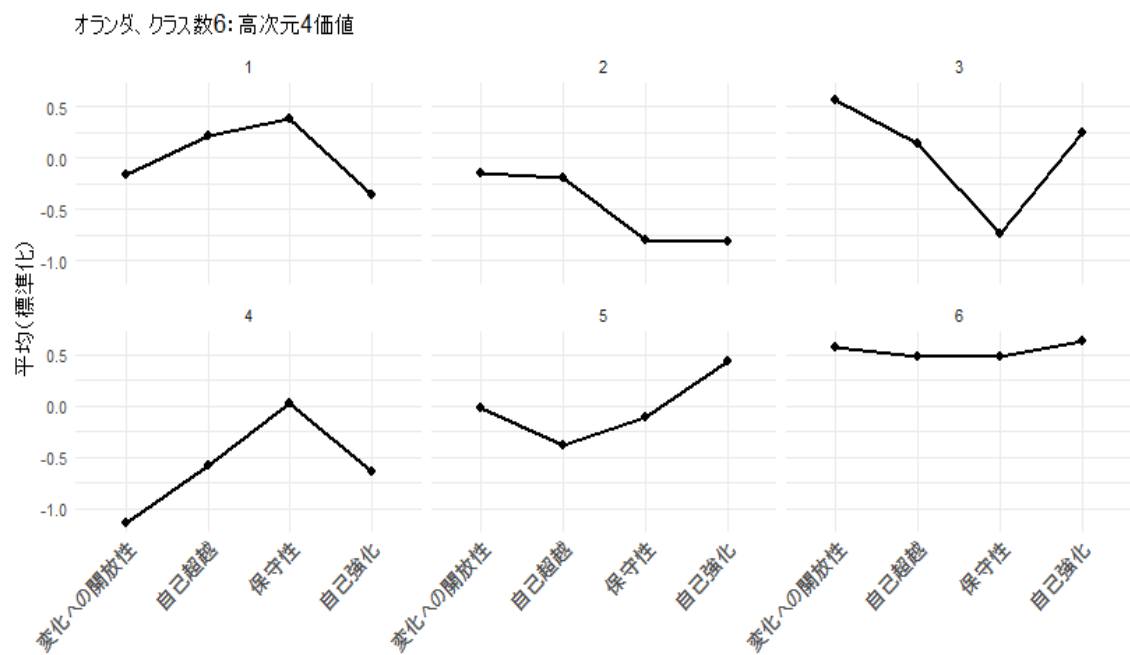


図 9 オランダ：クラス 6 つの場合の各クラスの価値観構造

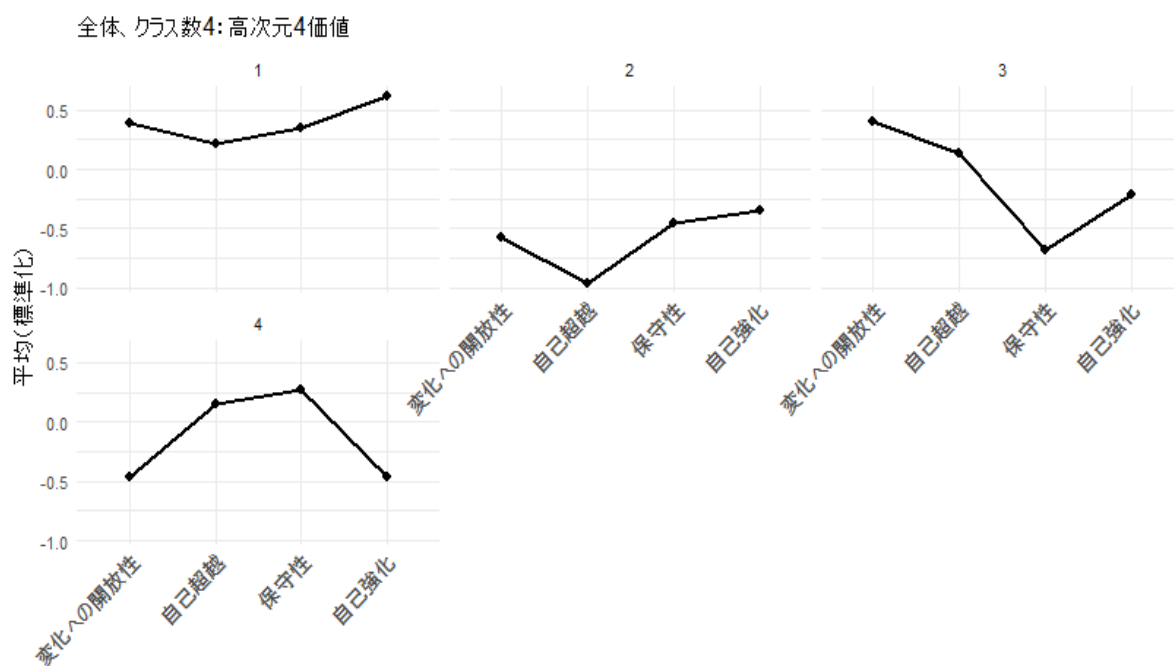


図 10 全体：クラス数4つの場合の各クラスの価値観構造

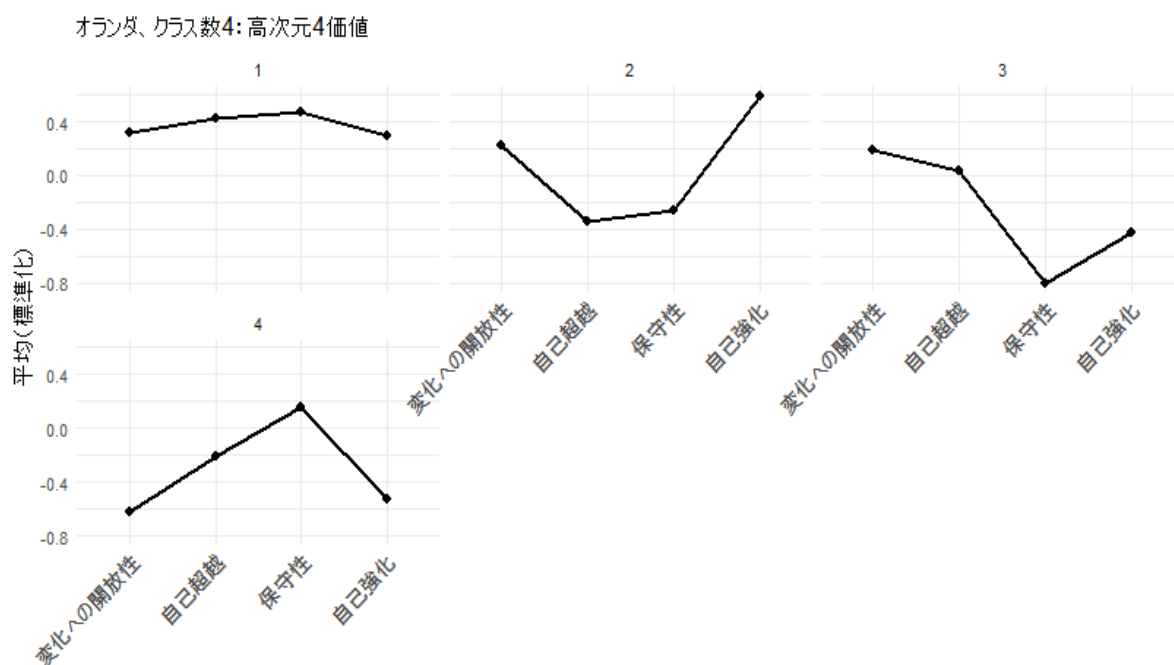


図 11 オランダ：クラス数4つの場合の各クラスの価値観構造

6 潜在プロファイル分析の結果

図は LPA クラスの価値観傾向を 4 つの高次元価値で表している。ある価値観が折れ線の頂点となっている場合、そのクラスは頂点の価値観を相対的に優先することとなる。反対に、折れ線の谷は最も優先されない劣位の価値観である。この潜在クラス分析の目的は価値観の相対的な重要性の構造を確認することであった。そのため、他のクラスとの価値観スコアとの比較よりも、そのクラスにおける価値観の相対的な優先度が重要である。ある価値観のスコアが全体平均よりも高くとも、そのクラスの中で他の価値観よりも低く評価されているのであれば、その価値観はクラスの中ではあまり重要視されていない劣位の価値観となる。

仮説の H1a では、保守性と変化への開放性の両方を追求する有権者が存在すると仮定した。しかし、両方サンプルのクラス 4 および 6 の結果を見るに、H1a で予測した有権者は、LPA クラスからは観測することができなかった。保守性と変化への開放性の両方が平均よりも高い水準を見せるクラスは存在するものの、いずれの場合も相対的に保守性と変化への開放性の 2 つが他の価値観よりも優先されるようなクラスは観察できない。これはすべてのクラスにおいて、シュワルツの価値観理論が想定する円環連続体が概ね再現されていることを示している。すなわちほとんどのクラスが滑らかな山型か谷型の形をとっている。その一方で、円環連続体から逸脱するような保守性と変化への開放性が同時に高い構造は確認されない。

次に価値観クラスが、右派ポピュリスト政党支持および、政治的態度とどのような関係にあるのかを分析する。解釈可能性を顧慮しクラス数 4 の結果を用いる。また、示めされた価値観構造をもとに、それぞれのクラスに便宜的に名前を付与する。

オランダ		全体	
クラス 1	保守_自己超越	クラス 1	変化_自己強化
クラス 2	変化_自己強化	クラス 2	自己強化
クラス 3	変化_自己超越	クラス 3	変化_自己超越
クラス 4	保守	クラス 4	保守_自己超越

7 分析3 潜在クラスの特徴

今回の分析では価値観クラスの政治社会的属性を確認するために潜在クラスを従属変数とする。右派ポピュリスト政党への投票、反移民的態度と同性愛者へ寛容といった独立変数が、潜在クラス分析と優位に結びつくのかを分析する。そのため、厳密には価値観が右派ポピュリスト政党投票を規定するのかどうかを分析するものではない。この分析ではどのような傾向有する回答者が、どのクラスに属する可能性が高いのかを検証する。

オランダにおいては右派ポピュリスト政党への投票と価値観クラスとの間に有意な関係は見られない。また政治的態度もクラス3(変化への開放性と自己超越が相対的に高い)のみ明確な傾向が見られた。移民にたいして寛容かつ、つよい同性愛者へ寛容さを持つ回答者はクラス3に属する可能性が高い。このように明確に政治的態度との関りが強いクラス3だが、やはり右派ポピュリスト政党とは投票とは有意な関係性が見いだせない。

他方で、サンプル全体の分析では右派ポピュリスト政党への投票と強く関連するクラスが観察された。クラス1は変化への開放性と自己強化の価値観を優先するグループである。右派ポピュリスト政党に投票し、反移民的かつ同性愛者へ不寛容な人はクラス1に属する可能性が高い。また全体クラス1の特徴として、価値観の対立構造があまり強くないことが挙げられる。すべての価値観が平均よりも高い水準をとり、自己強化と変化への開放性が相対的に高いものの、全体としては比較的緩やかな山型を形成している。

右派ポピュリスト政党への投票する可能性が低く、移民に寛容な人は、クラス4(保守性と自己超越)に属する可能性が高い。右派ポピュリスト政党への投票をめぐる全体クラスの価値観傾向として、クラス1(変化への開放性と自己強化)とクラス4(保守性と自己超越)の関係が見られた。また、全体の傾向としては、反移民的な人が属するクラスは、同性愛者にも不寛容(全体のクラス1と2)であり、反対に移民に寛容な人が属するクラスは同性愛者にも寛容な傾向(オランダのクラス3、全体のクラス3)が見られた。しかしそのような傾向が右派ポピュリスト政党への投票と結びつく例は全体クラス1のみである。

	クラス1保守_自己超越	クラス2変化_自己強化	クラス3変化_自己超越	クラス4保守
(Intercept)	0.27*** (0.06)	0.96 (0.22)	0.17*** (0.04)	0.23*** (0.05)
RPPvote	1.37 (0.35)	0.81 (0.25)	1.16 (0.45)	0.81 (0.22)
反移民z	1.00 (0.07)	1.12 (0.09)	0.76** (0.07)	1.08 (0.08)
同性愛寛容z	0.98 (0.06)	0.96 (0.07)	1.78*** (0.23)	0.85* (0.06)
女性	1.39* (0.18)	0.41*** (0.06)	0.99 (0.16)	1.42* (0.20)
教育水準z	1.02 (0.07)	1.15+ (0.09)	1.42*** (0.13)	0.70*** (0.05)
年齢z	1.07 (0.07)	0.58*** (0.05)	0.95 (0.08)	1.50*** (0.11)
Num.Obs.	1134	1134	1134	1134
AIC	1418.3	1133.6	965.2	1291.9
BIC	1453.6	1168.9	1000.5	1327.2
Log.Lik.	-702.169	-559.824	-475.610	-638.972
RMSE	0.46	0.40	0.36	0.44

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表8 オランダでの価値観クラスのロジステック回帰(オッズ比)

	クラス1変化_自己強化	クラス2自己強化	クラス3変化自己超越	クラス4保守自己超越
(Intercept)	0.72*** (0.05)	0.27*** (0.02)	0.23*** (0.02)	0.20*** (0.01)
RPPvote	1.21** (0.07)	0.91 (0.07)	1.00 (0.08)	0.84** (0.06)
反移民z	1.25*** (0.03)	1.08** (0.03)	0.70*** (0.02)	0.95* (0.02)
同性愛寛容z	0.92*** (0.02)	0.89*** (0.02)	1.44*** (0.05)	1.00 (0.02)
女性	0.85*** (0.03)	0.76*** (0.04)	0.92+ (0.04)	1.53*** (0.07)
教育水準z	0.98 (0.02)	1.06* (0.03)	1.27*** (0.03)	0.84*** (0.02)
年齢z	0.75*** (0.02)	1.16*** (0.03)	0.80*** (0.02)	1.53*** (0.04)
Num.Obs.	11698	11698	11698	11698
AIC	15069.3	10005.8	10616.5	13302.1
BIC	15120.9	10057.4	10668.1	13353.7
Log.Lik.	-7527.675	-4995.897	-5301.245	-6644.048
RMSE	0.48	0.36	0.38	0.44

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表9 サンプル全体での価値観クラスのロジステック回帰(オッズ比)

4 章 結論

一連の分析結果によると、反移民的態度がほとんどの事例で右派ポピュリスト政党への投票を強く予測する。ノルウェーとスウェーデンでは同性愛者への不寛容さが右派ポピュリスト政党への支持に繋がり、反対にベルギーでは同性愛者への寛容になると右派ポピュリスト政党に投票する可能性が高まった。

一方で同性愛者への寛容さと反移民的態度の交互作用はどの国でも統計的に有意な結果得られなかった。同性愛者への寛容さをリベラルの代理変数と考えると、リベラルな人ほど反移民的態度が右派ポピュリスト政党への投票につながるという因果関係(仮説 H1c)は確認されない。むしろ同性愛者への寛容さ、ひいては有権者のリベラルさに関係なく反移民的な人が右派ポピュリスト政党への投票することが示された。

価値観については、変化への開放性がいくつかの事例(オランダ、ノルウェー、オーストリア)で右派ポピュリスト政党への投票と正の関係にあった。また保守性はデンマークのみで統計的に有意な結果が得られた。仮説 H1b では保守性と変化への開放性の双方が高いは右派ポピュリスト政党への投票する可能性が高いと仮定した。しかし、国レベルで見ると、保守性と変化への開放性が同時に右派ポピュリスト政党への投票と正の関係にある事例は見られない。よって仮説 H1b は棄却された。

また価値観と政治的態度の交差項モデルは、オーストリアを除いて統計的に有意な結果を得ることはできなかった。変化への開放性の価値観および、反移民的態度は右派ポピュリスト政党へ投票を説明するものの、両者の交互作用は確認されなかった。反移民態度およびに価値観は独立して右派ポピュリスト政党支持に寄与しているといえる。

潜在プロファイル分析では、個別の価値観ではなく、個人における価値観の相対的重要性からなる価値観構造に注目した。仮説 H1a では保守性と変化への開放性の両者を特に高く優先する有権者がいることを仮定した。この過程は、理論的には対立するはずの価値観を同時に優先する有権者が一定数存在するのではないかという疑問に基づくものである。

しかしながら、すべてのクラスにてシュワルツの理論が想定した円環連続体構造を概ね再現する形となり、保守性と変化の解放性の双方の価値観を同時に追求するような価値観構造は見られなかった。

さらに、価値観構造と右派ポピュリスト政党への投票関係を確認したところ、オランダでは特定のクラスが、右派ポピュリスト政党を支持するという結果は得られなかった。サンプル全体の結果としては、変化への開放性と自己強化の価値観を優先するクラスが右派ポピュリスト政党へ投票する可能性が高い傾向にあった。このクラスにおいては、反移民的かつ、同性愛者に不寛容な傾向が確認された。また、同性愛者への寛容さと反移民的態度を両立するようなクラスは存在しない。

分析結果から、右派ポピュリスト政党への投票は主に反移民的態度によって説明されることが明らかになった。一方で、同性愛者への寛容さは、ほとんどの国で投票行動と有意な関連を示さなかった。したがって、右派ポピュリスト支持者は必ずしも性的マイノリティーに強い不寛容を示すわけではなく、反移民的態度こそが投票行動の主要な決定要因であるといえる。

従来の研究では、変化の解放性は市民の自由や移民への寛容を増進するとされていた (Schwartz et al. 2013)。しかし、分析では変化の解放性の価値観がオランダを含む複数の国で右派ポピュリスト政党への投票につながっていた。そして、変化の解放性の価値観は反移民的態度とは独立して右派ポピュリスト政党支持に作用するのであった。つまり、変化の解放性の価値観は、それ単体でポピュリスト政党への投票を説明する価値観であるといえる。価値観の相対的な重要性や反移民的態度・同性愛者への態度に関係なく、変化の解放性を志向する有権者は右派ポピュリスト政党に投票する傾向がある。

この結果は、ポピュリズムの性質と照らし合わせると示唆的な結果であるといえる。反エリート主義・既存政治への不満がポピュリストを特徴付けるのであれば、変化への開放性は、まさに現状の政治に対する変革志向の表れである。また、変化への開放性と反移民

的態度との交互作用が確認されなかったが、この結果は反移民的な右派ポピュリスト政党の支持者と変革志向的な支持者は根本的に異なる支持者層であることを示唆している。そして、オランダをはじめとする西欧および、北欧の右派ポピュリスト政党は既存政治の打破を望む変革志向の有権者、この2つのタイプの有権者に支えられている。今後もし、反移民的な政党が政党システムにおいて安定的な地位を確立し既存政党化するのであれば、変化への解放性を志向する有権者は右派ポピュリスト政党から離れてくかもしれない。次なる改革志向の政党が反移民的な立場を採らなくとも、変化への開放性を志向する有権者は彼らを支持する可能性が高い。変化への解放性は極めて改革的な政治志向と結びつくポピュリズム的な価値観であるといえるだろう。また、移民問題が顕在化している現在のヨーロッパにおいて、反移民的態度は、価値観や他の政治態度を超えて反移民政党への支持に繋がるといえる。ただ、今回の分析では以上の主張を支える経験的証拠は十分ではない。特個人的価値観とポピュリズムとの関係については今後の研究の蓄積が期待される。

最後に、一連の分析からは「リベラル故の反イスラーム」は有権者の間では確認されなかった。同性愛者への寛容さは多くの事例で右派ポピュリスト政党への投票とは無関係であった。「リベラル故の反イスラーム」は、オランダをはじめとする西ヨーロッパにおいて、特別リベラルな有権者に対するアピールではないのであろう。むしろ性的マイノリティーへの寛容さが政治的立場を超えて一般化した社会であるからこそその反移民的な言説のあり方であると理解できる。オランダのようにいち早く同性婚を制度化し、同性愛者への寛容さやジェンダーに対する進歩的な態度が浸透した社会において、「リベラル故の反イスラーム」の「リベラル」とは前提であり、その社会における特別な態度であるわけではないのであろう。

引用文献リスト

外国語文献

Akkerman, T., (2015) ‘Gender and the radical right in Western Europe: a comparative analysis of policy agendas’, *Gender and Populist Radical-Right Politics*, 32(1), pp. 37-60.

Akkerman, Agens. Cas Mudde, and Andrej Zaslove. 2014. ‘How Populist Are the people? Measuring Populist Attitudes in Voters’. *Comparative political Studies* 47(9) 1324-1353.

Baro, E.(2022) ‘Personal Values Priorities and Support for Populism in Europe—An Analysis of Personal Motivations Underpinning Support for Populist Parties in Europe’, *Political Psychology*.43(6), 1191–1215.

Blackburn, M.,(2022) ‘The Persistence of the Civic–Ethnic Binary: Competing Visions of the Nation and Civilization in Western, Central and Eastern Europe’, *National Identities*, 24(5), pp. 461-480.

Davidov, E. (2008) ‘A Cross-Country and Cross-Time Comparison of the Human Values Measurements with the Second Round of the European Social Survey’, *Survey Research Methods*, 2(1), pp. 33–46.

Eurostat (2016) “Asylum in the EU Member States. Record number of over 1.2 million first time asylum seekers registered in 2015 Syrians, Afghans and Iraqis: top citizenships.” *Eurostat news release* 44/2016.

Frankel, S.H. (2022) ‘Spinoza’s defense of democracy and the emergence of secularism’, *Religions*, 13(11), Article 1101.

Geddert, J.S. (2017) ‘Hugo Grotius’ modern civil religion: Source of Europe’s Stoic liberalism?’, in Ward, A. (ed.) *Brill’s Companion to the Reception of Cicero*. Leiden: Brill, pp. 419–445.

Hawkins, Kirk A and Cristóbal Rovira Kaltwasser. 2017. ‘The Ideational Approach to Populism.’ *Politics and International Relations* 52(4); 513-528.

- Hawkins, Kirk. Scott Riding and Cas Mudde.(2012) ‘Measuring Populist Attitudes’. *Political Concepts Committee on Concepts and Methods Working Paper Series* 55; 1-35.
- de Lange, S.L. and Mügge, L.M. (2015) ‘Gender and right-wing populism in the Low Countries: ideological variations across parties and time’, *Patterns of Prejudice*, 49(1–2), pp. 61–80.
- Lancaster, C.M.(2020) ‘Not So Radical After All: Ideological Diversity Among Radical Right Supporters and Its Implications’, *Political Studies*, 68(3), pp. 694–716.
- Lancaster, C. M. (2022) ‘Value shift: Immigration attitudes and the sociocultural divide’. *British Journal of Political Science*, 52(1), 1–20.
- Lönnqvist, J.E. and Ilmarinen, V.(2024) ‘Basic personal values and vote choice in 20 European countries’, *European Journal of Personality*. Advance online publication.
- Mijnhardt, W. W. 2010. ‘Urbanization, culture and the Dutch origins of the European Enlightenment’. *BMGN - Low Countries Historical Review*, 125(2–3), 141–177.
- Mudde, C. (2004). ‘The populist zeitgeist.’ *Government and Opposition*, 39(3), 542–563.
- Norris, P. 2020. ‘Measuring populism worldwide’. *Party Politics*, 26(6), 697–717.
- Rath, J. 2009.’ The Netherlands: A reluctant country of immigration’. *Tijdschrift voor Economische en Sociale Geografie*, 100(5), 674–681.
- Sagiv, L. and Schwartz, S. H. 2022 ‘Personal Values Across Cultures’, *Annual Review of Psychology*, 73, pp. 517–546.
- Schwartz, S. H. 1992 ‘Universals in the content and structure of values: Theoretical advances and empirical tests in 20 countries’, in M. Zanna (ed.) *Advances in experimental social psychology*, Vol. 25, New York: Academic Press, pp. 1–65.
- Schwartz, S. H. 1994 ‘Are There Universal Aspects in the Structure and Contents of Human Values?’, *Journal of Social Issues*, 50(4), pp. 19–45.
- Schwartz, S. H. 2006 ‘Value orientations: Measurement, antecedents and consequences

across nations', in R. Jowell, C. Roberts, R. Fitzgerald and G. Eva (eds.) *Measuring attitudes cross-nationally - lessons from the European Social Survey*, London: Sage, pp. 169–203.

Schwartz, S. H. and Boehnke, K. 2004 'Evaluating the structure of human values with confirmatory factor analysis', *Journal of Research in Personality*, 38(3), pp. 230–255.

Schwartz, S. H., Caprara, G. V. and Vecchione, M. 2010 'Basic personal values, core political values, and voting: A longitudinal study', *Political Psychology*, 31(3), pp. 421–452.

Schwartz, S. H. 2012 'An overview of the Schwartz theory of basic values', *Online Readings in Psychology and Culture*, 2(1).

Schwartz, S. H., Cieciuch, J., Vecchione, M., Davidov, E., Fischer, R., Beierlein, C., Ramos, A., Verkasalo, M., Lönnqvist, J. E., Demirutku, K. and Dirilen-Gumus, O. 2012 'Refining the Theory of Basic Individual Values', *Journal of Personality and Social Psychology*, 103(4), 663–688.

Schwartz, S. H., Caprara, G. V., Vecchione, M., Bain, P., Bianchi, G., Caprara, M. G., Cieciuch, J., Kirmanoglu, H., Baslevant, C., Lönnqvist, J. E., et al. 2013 'Basic Personal Values Underlie and Give Coherence to Political Values: A Cross National Study in 15 Countries', *Political Behavior*, 36(4), 1–32

Simonsen, K.B. and Bonikowski, B., 2019. 'Is civic nationalism necessarily inclusive? Conceptions of nationhood and anti-Muslim attitudes in Europe', *European Journal of Political Research*, 59(1), 114-136.

Xie, J., Liu, X., Zhang, Y. and Li, L. (2022) 'Personal value profiles and their psychological outcomes: A latent profile analysis among Chinese young adults', *_Frontiers in Psychology_*, 13, article 957563.

日本語文献

- 板橋拓己. 2024. 「ポピュリズムを考える」 細谷雄一、板橋拓己編『民主主義は甦るか？—歴史から考えるポピュリズム』慶応大学出版会 267-284.
- 中谷義和. 2017. 「ポピュリズムの政治空間」 中谷義和他編『ポピュリズムのグローバル化を問う——揺らぐ民主主義の行方』法律文化社、3-26.
- 水島治郎. 2010. 「オランダ」 馬場康雄、平島健司編『ヨーロッパ政治ハンドブック【第2版】』東京大学出版会、66-77.
- 水島次郎. 2016. 『ポピュリズムとは何か——民主主義の敵か、改革の希望か』中公新書.
- 水島治郎. 2019. 『反転する福祉国家——オランダモデルの光と影』岩波書店.
- ムフ、シャンタル. 2019. 『左派ポピュリズムのために』(山本圭、塩田潤訳)明石書店.
- ミュデ、カス. クリストバル・ロビラ・カルトワッセル. 2018 『ポピュリズム——デモクラシーの友と敵』(永井大輔、高山雄二訳)白水社.
- ミュラー、ヤン＝ヴェルナー. 2017. 『ポピュリズムとは何か』(板橋拓己訳)岩波書店.
- 渡辺博昭. 2017. 「北欧のポピュリズム—反税から反移民へ」 中谷義和他編『ポピュリズムのグローバル化を問う——揺らぐ民主主義の行方』法律文化社 119-138.
- ラクラウ、エルネスト. 2018. 『ポピュリズムの理性』(澤里岳史、河村一郎訳)明石書店.

ネット記事

- Kirby, P. 2025 「オランダ総選挙、中道リベラル政党が勝利を宣言 極右与党と接戦」『BBC News Japan』11月1日、<https://www.bbc.com/japanese/articles/cx2nn70g272o> (2026年1月10日閲覧)
- John, T. 2017 ‘Geert Wilders: What to know about the “Dutch Donald Trump”’, *Time*, 3月10日. <https://time.com/4696459/geert-wilders-the-dutch-trump/> (2026年1月10日閲覧).

データセット

European Social Survey ERIC.2018. *European Social Survey Round 9 Data (ESS9)*. Data file edition 3.1. NSD – Norwegian Centre for Research Data, Norway – Data Archive and distributor of ESS data for ESS ERIC. doi:10.21338/NSD-ESS9-2018.

Norris, P. 2020. *Global Party Survey (GPS), 2019*. Harvard Dataverse. doi:10.7910/DVN/WMGTNS.